
堕ちた青年の見る世界～螺旋の回廊～

片瀬 綾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堕ちた青年の見る世界―螺旋の回廊―

【Nコード】

N7081V

【作者名】

片瀬 綾

【あらすじ】

能力者という存在が認知され一般に浸透されている世界。

そんな世界の日本における能力者の名家に生まれた竜哉。

しかし、彼は能力が発現しなかった。落ちこぼれとして家に勘当された竜哉。そんな彼が名を変えて通う能力者の学園で起きる能力者関連の事件。

彼の周りの変わり者たち、さまざまな人々、組織等の思惑が交差する学園能力バトルファンタジー今ここに開幕！

First of prologue (前書き)

初めまして！片瀬綾です。処女作なんで生ぬるい目で見てやってください。

First of prologue

さっきまで銃声や爆発音が鳴り響いていた。

女、子供が泣く声が聞こえていた。そのすべてがなかったかのように静かに、静かになつてこの場所。まるで時が止まったかのようなそんな錯覚をしてしまうそんな気がする場所。

しかし周りには少し前まで人間だった物が転がっている。

10や20どころの数ではない。

水平線まで続くこの荒野に何百という肉の塊が転がっている。その中心にいる人物が居たそれは、まだ年端のいかなない少年だった。その名は葛城^{かつらぎ}・・・・・奥村竜哉^{おくむらりゅうや}であった。

それは今からおよそ8年前のことだった。

ジリリリリリリ！！！！！！と目覚まし時計がこの部屋の主人を起こそうといきりたる。

グチャツ 明らかに目覚ましを止める音ではない音が出たが、この部屋の主人の1人を起こすことには成功できたようだ。

「・・・・・・ またやつちまったよ。はあ、新しく買わないといけなくなつちまったよ。めんつどくせえ」もはや原型をとどめていない目覚まし時計を見ながらつぶやいたやる気のやの字もみえない寝癖のたつた黒髪の青年こそこの部屋の主人である奥村竜哉である。

そのまま二度寝をしようと布団にもぐろうとすると「いえー！！起きてるかーい、リュウヤん！！」

バラの花を啜えた変人が扉を開けてきた。

「・・・・ 五月蠅い、陽」竜哉は心底めんどくさそうな顔をした。

「悪い悪い、でもよ、今日は新入生の入学式やで！女の子をチエックしなあかんやろ」

そんなことを言う変人もとい相馬陽そうまやうのその言葉に反応した馬鹿が居た。

「なんだって！？それはしなければいけねえな」

謎の生命体Xもとい馬鹿もといこの部屋のもう1人の主人である狩かり野健二がベッドから這い出てきた。

「お前ら一旦、黙れ」

「何言ってんだ、竜哉。女の子だぞ！これを行かなくては男が廃るぞー！！」

「そうだぞリユウやん」

あほ二人が叫んでいるが竜哉はそそくさと二度寝をしようとしていた。

「それよりお前ら時間はどうした？」

寝ようとした竜哉は入学式の手伝いの時間に遅刻ギリギリだということ思い出した。

「「あ！？」」

「行くぞケンやん」

「おう！」

あほ二人は走って行った。

「あいつら、制服じゃないこと気づいてねえな……ま、いつか。寝よ、寝よ」

この呟きは風に消えていった。そして、竜哉は、さぼり、今日も寝る。

そびえ立つ巨大な門の前に2人の少年と少女がいた。
この2人もこの物語の舞台に必要な登場人物である。

「何度見ても大きいね。ここの門は、校舎もだけど」

「そうね、ここにいつまでいてもしょうがないし、早く中に入ろう。」

「そうだね、早くみんなに会いたいしね」

そうしてこの2人も舞台の上へと上がったのであった。

First of prologue (後書き)

アドバイス等がありましたらドシドシ送ってください。

Second of prologue

「やーい、落ちこぼれ!!」

「おい、能力見せてみるよ」

「やめなよ、こいつ発現してもいないんだから。宗家のくせに発現しないってとんだ面汚しだよな」

「そうだよな。おい、落ちこぼれ何とか言ってみろよ!!」

(僕は、好きで発現してないわけじゃない。なのに、なのに……)

古い記憶もまた螺旋のように廻る。

所変わって学園の屋上 「はて、今年は六大家が多く入ってきたな」

やややせ気味の青年が1人いた。

さつきまでは。

「うれしいですか、串刺し公^{ウツド}」

青年の後ろに、特徴というものがすべて抜けきった男が出てきた。

「いや、僕の興味の対象はただ一つだけだよ。今も昔も」

「そうですか。残念だ」

そう言うと、その男はどこからともなく消えた。

「これから始まりますよ」

そう屋上に残った青年は雲1つない青空に向かって呟いた。

「はてはて、多いのう今年は、問題が起きなきゃいいがのう。まあ

無理か」

片手に新入生の資料を持ちながらこの竜哉たちの通うリグザリオン学園の理事長、仙道秋人せんどうあきとは理事長室で頭を抱えていた。

そこに、トントントン、「生徒会会長の九鳳院楓です」

「どうぞ」

「失礼します」

そう言って入ってきたのは、黒髪が腰まであり十人中十人美人と言ふような少女であつた。

「はてはて、九鳳院君、何の用かな？」

そう、仙道が楓に訊くと、彼女は口元をあげた。

「このメンバーを生徒会と監査委員会に入れる許可をもらいに来たのですが」

「どれどれ、彼ら六大家はいいとして、彼は難しいですよ。それに彼は力を抑えてる。それに加え彼はランク？ですしね」

そう仙道が言うと、楓は待つてましたとも言つような顔をした。

「しかし、私は彼の力を知っている。さらに、彼には裏に入つてもらうつもりですから」

それを聞いた仙道は、やれやれとでもいうように、肩を諫めてわかりました勝手にしてくださいと言った。

九鳳院は満足の笑みで理事長室から出て行つた。

徐々に歯車は揃い廻る。ゆっくりと、とてもゆっくりと。だが確実に廻つていく。

S e c o n d o f p r o l o g u e (後書き)

アドバイス等があればドシドシ送ってください。

5つの新星は新たな出会いと始まりとともに 前編（前書き）

どうも、片瀬 綾です。今回は世界観が主なので短いですが、とりあえず能力はまだの方向です。

5つの新星は新たな出会いと始まりとともに 前編

‘能力者’この世界には特異な能力を持つ者がいる。そんな認識が一般に浸透している世界。それに伴い世界の国々で能力者の犯罪が多発した。

それに対し世界の国々は、能力者の犯罪を取り締まり、さらに国々の能力者たちを管轄におく能力者の元締めとして 能力者協会通称“協会”を作った。しかし、そんな“協会”の管轄下にいない能力者たちの組織が多くあり、国々はそれに対抗するために独自に能力者を抱え対応した。

ここ日本では多くの優秀な能力者を排出する6つの名家通称6大家とカテゴリー^{キング}K7人を抱える政府組織によって能力者の犯罪に対応している。

ちなみに、カテゴリーとは能力を用いた総合的戦闘能力および総合的特殊能力の段階を示したものでトランプにちなんで一番下のA^{エース}から一番上のK^{キング}の13段階で示される。これは協会が示す指標である。

ここで竜哉たちが通っている学園リグザリオン学園について少し説明しよう。

この学園は、総生徒数1000人を超えるマンモス校であり、能力者の育成と研究を主とする学園であり日本にあるうちの能力者学園3つの1つでもある。

また、生徒は学年ではなくランクによって分けて効率の良い指導方法を導入している。ランクは？、？、？の4つがあり？が最高？が最低ランクとなる。ランクとは学園が定める能力の指標で純粋に能力の強さを示すものである。

そして、ランク分けとして年に3回ランク調査と呼ばれるものが行

われる。これは今現在の生徒のランクが妥当であるかというものを
視るものである。この調査によって自分のふさわしいランクに上が
ったり下がったり変わらなかったりするのです。

この学園の特徴として挙げるならばもう1つある、それは、決闘ディールと
呼ばれるものである。

これは、立会人に教師1名以上、生徒会委員1名以上、第3者が1
名以上の3名以上のもとで行われることができるものである。勝者
は敗者に、道德・法律に反しない事柄1項目を要求できるものであ
る。

閑話休題

「……………それではあなたたち新入生の皆さん青春を謳歌し学園生
活をENJOYしてください。これで私の話は終わります。礼!」
そう、仙道は締めくくって入学式は終了した。
入学式の終了とともに新入生たちはそろそろと体育館からでいく。
その中でも、目立つ美少年美少女の団体がいた。

「やっと終わったな、瞬」

茶髪に金髪のメッシュを入れてる少年が隣にいる黒髪の少年に話し
かけた。

話しかけられた黒髪の少年は、苦笑いを浮かべながら答える。

「そうだね、良。理事長の話と楓さんの話長かったもんね」

黒髪の少年、瞬と茶髪に金髪メッシュの少年、良は歩きながら話し
ている。とそこに

「そうそう、でも鮮花はさすがだったわよね」

茶髪をセミロングにしている少女が会話に入ってきた。

さらに

「ほんとほんと！ あざちゃん、すごかったなあ〜壇上で凜としてた姿は。それに、そうとれるもんじゃないよ、新入生代表なんて」

そう上の少女に同調してうんうんと首を縦に振る、アッシュグレイの髪をポニーテールにしている少女。

その少女の目の奥には何かきらきら光るものが見える。

「そんなことないよ、鈴、優奈。たまたまだって」

そうこの話題の中心である鮮花はハミカミながら2人に言った。

その時だった、彼らが中庭に差し掛かった時。

「うるさいあほ。お前らは黙ってればいいんだよ、めんどくせえ」

「なんですと〜あほってなんやねんあほって。ひどくないか〜リュウヤん」

「あほにあほって言って何が悪い」

そんな変な先輩っぽい人たちに会った。

5つの新星は新たな出会いと始まりとともに 前編（後書き）

誤字脱字感想アドバイス等ありましたら遠慮なくどうぞ。

5つの新星は新たな出会いと始まりとともに 中編（前書き）

どうも、片瀬 綾です。処女作なんで生暖かい目で見てください。

5つの新星は新たな出会いと始まりとともに 中編

陽、健二の2人はあの後、先生に怒られ制服に着替えるために部屋に戻ったところで、二度寝を実行している竜哉を半ば強制的に中庭に連れ出し新生女子の観察および品定めという人としてどうかと思う最低行為をしている状態である。

「ちよつ、ケンやんどくニャー。ケンやんが邪魔でよく見えないニャー」

「それはないぜ、陽。ここは俺の特等席だぜ」

「そんなこと知らないニャー。ケンやんの尻が邪魔で見えないニャー、どくんだケンやん」

傍から見れば怪しさ抜群の2人。

それを死んだ魚のような目で眺めている竜哉。

（はぁー、めんどくせえ。寝たい寝たい寝たい寝たい。

…… やべつ、寝たいと思ってたらマジで眠たくなってきた）

「あぁー眠い」

そんなことを考えている間も陽と健二の言い争いは続く。

今まで黙っていたがついに竜哉も限界を超えるときがきた。

「うるさいあほ。お前らは黙ってればいいだよ。めんどくせえ」

「なんですとーあほってなんやねんあほって。ひどやないかーリュウやん」

「あほにあほって言って何が悪い」

（はあく、くそめんどくせえ。ここで寝ていいよないよないんですよね）

そんな寝ることしか考えてない竜哉と女の子の観察しか考えていない陽と健二にちかづくかげがあった。

「お前たち何をやってるの？」

天下の生徒会会長九鳳院楓であった。

楓は入学式で壇上上がりしゃべった後、中庭を散歩して時間をつぶしていたのである。

「あ、どうもっす。会長」

「あれはなんなの？」

そう楓が指差す方にはいまだ言い合いをしている陽と健二がいた。

「あゝあれはただのあほですよ」

「いや、あれは怪しすぎるわよ。あれは」

そう、いま陽と健二は草むらに隠れているが完全に隠れておらずさらに、

グネグネしているのでとても怪しい。いや、はっきり言おう気持ち悪い。

そして、なぜか空を見る竜哉。

「おい！ 陽、健二！」

「ん？」

「あ、会長さんじゃないですかニヤ」

「会長さんじゃないすつか。何の用すか」

「はあ、今頃気づいたの。だいぶ前からいたわよ。
で、お前たちは何してるの？」

「決まってるじゃないかニヤ、会長さん」

「ん？」

「かわいい子探したニヤ」

Vサインをしながら声高々と宣言する陽。
そして、呆れる楓。なおも空を見る竜哉。

「あ！それと竜哉あなたn「楓さ〜ん！」…… ん？」

楓は呼ばれた方向に顔を向けると、数人の少年少女たちがこちらに向かってくるのが見えた。

竜哉もそれにつられてその集団を見る。

竜哉はその集団の中に過去の人物を見つけ表情が少しこわばったが、
すぐに元のやる気のない表情。

死んだ魚のような眼をした。この後起こりうるであろうと思われる
事態にどう対処するかを考えながら。

これもまた、歯車の1つである。
この出会いもまた必然であり、偶然である。

5つの新星は新たな出会いと始まりとともに 中編（後書き）

誤字脱字感想等ありましたら、どしどし送ってください。

5つの新星は新たな出会いと始まりとともに 後編（前書き）

どうも片瀬 綾です。

今回はちょっとつていうかだいぶ長くなりました。

5つの新星は新たな出会いと始まりとともに 後編

「ねえ、そういえばすごいといえば楓さんもすごかったね」

そう、鈴が思い出すかのように目を閉じて話し出した。
何を隠そう鈴は楓さんのファンだったりしたりする。

（また出たわ。鈴の楓さんすごい話。いやじゃないけど、
なんかこのときの鈴ってめんどくさいんだよね）

そう鮮花は思っていたりしちゃっているのは、ここだけの話である。

「うん！そうだね。楓さんはなんか大人の女の色気が出てる気がする」

「なんか、話題がずれてるような気がするのはいのせいじゃないよね。良、鮮花」

「……………気のせいじゃないと思うよ。たぶん」
苦笑いで答える鮮花。

「……………俺はもそう思うけど、あの2人じゃ收拾つかない
だろ」

冷静かつ端的にこの場の状況を言う良。それに、なんとなくなず
いてしまう2人。

鈴と優奈の会話を聞きながらふと中庭のほうに目を向けてみると男
子生徒らしき人が

3人が見えた。だが、鮮花は見てはいけないものを見てしまった気

がしたのだ。

なぜなら

（な、なんか、3人のうちの2人が怪しすぎる。ものすごくケネクネしてる！？）

そう鮮花は見なかったことにしようと思い鈴たちの会話に参加しようとした、

そのとき彼女の目に楓の姿が見えてしまい思わず、

「あ、楓さんだ」 そうつぶやいてしまった。

「え！？鮮花どこ？どこに楓さんがいるって？」

そのつぶやき（かなり小声）を聞き漏らすことがない。

鈴の楓さんリーダーに引つかかったその瞬間だった。

仕方がなく鮮花は鈴に教えることにした。

「ほら、鈴！中庭のあそこ」

そう指差したほうをみんなが見るとそこには楓さんとなにやら

寝転んでいる男子生徒と話しているが見えた。

「あゝほんとにいるよ。あゝあ、鈴が行くよこれ。俺しら」楓さん「ん」

良の言葉をさえぎるように鈴が楓に向かって叫んだ。

そして、鈴は楓の元に向かって走る。

仕方なしにそれについてゆく鮮花たち。

「楓さん！」

そう呼ばれたので楓は呼ばれた方向を見てみると、よく見知った顔の集団であることがわかった。彼らが近づいてきたので話しかけることにする楓だった。

「ん？・・・なんだ鮮花たちじゃないか。どうしたんだ」

「どうしたもこうしたもないですよ、楓さん！すごかったです、かつこよかったです！」

そう興奮気味に鈴が楓に詰め寄った。

そんな鈴に、若干引いたのは言うまでもない。

そんな状況に空気を読まない男たちによってぶち壊された。

「会長さん！そちらのかわいい女の子は誰なんですか？」

「そうなんだにや」。紹介することをわれわれは要求するにや」

言わずもがな陽と健二である。

それに苦笑とともにありがたいと感じる楓であった。

「そうだったな。一応鮮花たちがよければ紹介するけど。どうだ」
鮮花たちに一応聞いてみる楓。

「別にいいですよ、私は。みんなもいいよね」

とほかのみんなに聞く鮮花。

「僕もいいですよ」

「私もいいよ」

「私は楓さんが言うなら」

「いやここで断る選択しないでしょ」

上から瞬、優奈、鈴、良の順で了承した。

なおここまでの会話で竜哉は半分寝ています。

「私から言いますね。私は、葛城鮮花かつらぎあさかといいます。
名前からわかるように六大家ですが気にしないでくださいね。」

丁寧^{ていねい}に頭を下げる鮮花。

「じゃあ次は僕ですね。僕は、葛城瞬かつらぎしゅん、鮮花とは双子ですから。
まああとは上に同じです」

「つぎは俺だ」^{ゆづまりん}「はいはい。私は、遊馬鈴ゆづまりんつていいですよ。
よろしく願いしまーす」お、おい！俺にかぶせるなよ！「」

自己紹介しようとした良は途中で鈴に言葉をかぶらされて、自己紹介ができなかった。

「お、落ち着いてりようー君。まあまあ、あつ！ 私は近衛優奈このえゆうなって言います。

よろしく願いしまーす」

良をなだめる優奈だが、ちゃっかり自分の自己紹介を済ますというまったく良を考えない所からも実はまったく心配されていない良であつた。

「うわあああああ！ 優奈まで！ちえっ、いいですよーだ。俺は朽花良くちはなりようです。よろしく願いします」

若干ふてくされながらも自己紹介する良であつた。

そして今度は先輩組みの番である。

「次は俺たちだな。俺は狩野健二。2年だよろしく！」

「次は俺だニヤー。おれっちは相馬陽だニヤー。残念ながらこつちの馬鹿と一緒に2年だニヤー」おい残念ってなんだよ！「……」

横から何かめんどくさいのがわめいていたが陽は無視することに決めた。

そして竜哉の番になった。まあ言わずもがな竜哉はやる気が無いが。

「はあゝあ。めんどくさいなあゝ。奥村竜哉だ。こいつらと同じ2年だ。終了、お休み」

竜哉のみめんどくさそうに自己紹介した。ここまで読んでいただいた人は気づいただろ、
竜哉と鮮花、瞬は兄妹弟である。きょうだい鮮花と瞬は気づいてないが。

「ところで先輩たちのランクって何ですか？楓さんが？なのは知ってるけど」

優奈は疑問であることを聞いてみた。その際首をかしげたその行動に名は言わないがアホ2人はテンションがあがった。するとここで楓の爆弾発言が出た。

「ん？こいつら全員ランク？だぞ」

「「「「え！」「」「」」」

啞然とする5人。さらに瞬が聞こうとするその時、キンコーンカーンコーン

・・・・・・チャイムが鳴った。

「ヤバッ！？　いくぞみんな！」

良が叫んだそれが契機だった。5人は慌てて教室に向かって走っていった。

「楓さん、ありがとうございました。先輩たちも。では私たちはこれで」

と鮮花が心底丁寧に別れの挨拶を言い走っていった。
だんだん消えていく彼らを見ながら竜哉はばれるかどうか心配でひやひやしていた。と後日語っていた。

「じゃあ俺たちも撤退だニャー。いくぞ、ケンちゃん、リュウちゃん」

「おう！」

「へい」

なんだかんだで彼らに付き合う竜也であった。

「お前ら、どこに行くんだ？」

「もちろん部室だニヤー」

「それじゃあ会長さんじゃあね」

「……」

「ああ、じゃあね」

竜哉、陽、健二の3人も歩いていった。
楓は彼らとは逆の方向に歩いていった。

5つの新星は新たな出会いと始まりとともに 後編（後書き）

誤字脱字等がありましたら教えてください。

竜哉と愉快な仲間たち・・・そして面倒ことの序曲（前書き）

どうも片瀬 綾です。

今回も能力出ません。すいません。

キャラがまた増える。

竜哉と愉快的仲間たち・・・そして面倒ことの序曲

何もする気がない集団　通称NSN部その部室に数人の男女が集まっている。

余談だが竜哉、陽、健二の3人もその部員だったりする。

「なあー、…………… なんかおもしろいことない？」

ソファーに横になつてゐる男…………… 円堂雄介えんどうゆうすけはこの部室内にいるメンバーに聞いてみる。

そのメンバーとはチェスやじまじょうをしている矢島翔やまのゆうと遠野百合、せつせと資料整理こくとうじょうけんいちろうをしている黒桐準一郎に聞いた。

ちなみに、今ここには入学式等でないNSN部のメンバーになる予定かみなしあげはというかむしろなつてゐる神無揚羽と竜哉たち三人を加えたメンバーがNSN部である。

「さあ、健二たちが来ればなんかやってくれるんじゃないかしら」といいながらクイーンを動かす、百合。

「そうそう、そういうのはあいつらの担当なわけだからな。あゝだるい」

そついい終えて、ナイトを動かす、翔。

「…………… それもそつか」

納得の雄介。

「お前らそんなことどうでもいいからこれ手伝えよ！」

ここで怒鳴ったのは準一郎である。彼が今やっているのは部の存亡やらメンバーがやった問題の清算やらである。それを1人でやっている時点で準一郎は真面目でありここでは異端である。

「そんな事言ったって、俺らがやるわけないだが」

「そうよ、ここにいる時点でそんな事やるやつなんていなわよ。あんと揚羽が例外なだけよ」

「ははっ、まさにそのとおりだね。それにしてもだるいわ」

「翔はいつもだるいそうね」

そんなくだらない話をしている。いつもNSS部はこんな感じである。

まああとここでいうなら百合と翔と準一郎は3年、雄介は2年、揚羽は言わずも1年である。

でもこの学園では学年ではなくランクで分けられるのであまり関係ないが一応ここに示すならば、

ランク？に竜哉、陽、健二、雄介の4人、ランク？に百合、翔、準一郎、揚羽の4人という風に分かれるのである。

閑話休題

そんな彼らが話していると、部室のドアが開き、何者かが入ってきた。

「しっつれ〜い！みんないる〜？」

健・・・まちがえた。馬鹿が入ってきた。

「あれ、揚羽ちゃん以外全員集合？珍しいニャー」

続いて陽と竜哉も入ってきた。

「お！ おかえり！ 陽、竜哉」

ソファーに横になっている雄介が部屋に入ってきた陽と竜哉に挨拶をする。

「あ、あれ、雄介。俺は、俺のことは」

「……俺、動物の言葉はわからないんだ」

深刻な顔で言う雄介。

「え？……あ、あれ俺人間だよ人間だよな？」

涙目になっている健二は陽や竜哉に聞いてみる。

「黒や〜ん、何怒ってるニャ〜。笑顔笑顔」

「百合、翔どつちが勝ってるの？」

両者とも華麗に無視。それに対し健二は。

「あ、あれ無視なの無視なの——！！？」

叫ぶ健二、これでも無視されるかと思いきやこれに反応した人物がいた。

「うるせえ！健二黙れ！俺が今何してるか見てわからねえのか。ああ！」

ここにきて準一郎がきれた。

「へ？…… すいませんでした！準一郎閣下」

健二は誰もがいつしたかわからないくらいの速さできれいに土下座した。

「ちょうどいい、健二。これ手伝え」

「え！？ほかのみんなもいるじゃ・・・っていねえ！？」

そう健二が見たものは、殺風景な誰もいない部屋だった。つまりは逃げたのだ。

「ふゝ危なかった。巻き込まれるとこだったニヤー」

「右に同じっていうかあの状態の準一郎は怖え。あ、それとチエツクメイト」

「はあ！？ うそ？」

「ドンマイ、百合」

とこんな感じで逃げてきた奴らおよびチェス。ここで竜哉は思った。
(あれ、雄介がいない。逃げるとき横にいたような気がしたんだけどな)

「てか、雄介がいないんだけど」

竜哉が思ったことを言った翔。

「たしかにマルやんがいないニヤ」

「そうね、でも大丈夫じゃない雄介だし」

「あゝうん大丈夫だろ。これからどうすんの？はあゝめんどくさい」

「そうね」

百合がこれからどうするか考えようとした時だった。

キーンコーンカーンコーン

“あーテストス、マイクのテスト中。これから名前を呼ぶものは生徒会室に来なさい。奥村竜哉、円堂雄介、狩野健二、相馬陽、矢島翔、遠野百合、黒桐準一郎、神無揚羽。これは命令です絶対に生徒会室に来なさい”

この放送を聴いた彼らの顔が露骨に嫌な顔、めんどくさそうな顔をした。

「で、どうすんのこれ命令とか言ってるけど。あゝだるい」

「行くしかないだろうな。はあめんどくせー」

「えゝ嫌よ私あんな女の顔を見たくないわ」

「いやいや、百合っち。これ行かなかつたらもつとめんどくさいに決まってるニヤー」

「ううゝ わかつたわよ行くだけよ。行くだけ!」

そうして彼らは目的の場所（強制的にだが）に向かってぞろぞろと歩いていった。

竜哉と愉快な仲間たち・・・そして面倒ことの序曲（後書き）

次回こそは能力出して見せます。

感想だめだしアドバイスや誤字脱字等があったら報告してください。

やる気のない者達は仕方なしに上に従う（前書き）

どうも片瀬 綾です。拙い文ですがよろしく願います。

やる気のない者達は仕方なしに上に従う

竜哉たちが部室で一悶着があったその頃
別の場所、新入生たちはいつと、鮮花たちが教室に入ってくると
ざわざわと五月蠅くなった。

「おいおい、あれって六大家の人たちだぜ」

「やつべー、ラッキーだし」

「キャー！！瞬様よ」「良様ー！！」

などなどこのような声が聞こえてきた。一方、その当事者たちはいつと

「おんなじクラスですね」

「みんなと一緒によかったわ」

優奈と鈴はのんきにだべっていた。そこに、良が何か思い出したように、その話の輪に入る。

「そうだな、そういえば、今日ってあれの日じゃなかったけ？」

「そうだね、父様たち最近忙しいみたいだったし」

それに同意するように瞬が答えた。

とそこで、「はい、席についてください。いまからクラスの説明

をします。」と教師が教室内に入ってきたため彼らは話をやめた。

「はい、注もーく!!!ここにいるのはランク?の新入生です。これから各クラスに行ってもらいますクラスには君たちの先輩方もいます。クラスに行ったら自己紹介してもらうので、頑張つてねー。じゃあ発表していくよー」

そして次々と名前が呼ばれ全員呼ばれたところで、そろそろと各クラスに移動していった。

移動してる途中で鮮花が「楓さんと一緒だったらいいな」といいそれに同調するように鈴が「うんうん、楓さん、あこがれるわよね」

そんな他愛のない話をしていた。

一方、竜哉たちはどういうと・・・

“もしもし、はい、・・・・・・そうです、え・・・・いない?うそですよね。・・・・・・まじっすか、・・・・・・はい情報が入り次第連絡してください。たのみます。・・・・・・はいさようなら”

「だめっす、雄介と連絡とれないわ」

両手をひらひらさせて竜哉は言った。すると、目つきを鋭くした楓が竜哉に向かって聞く。

「今、電話してたのはだれなのかしら?竜哉」

さらに、「そうなんだにゃー。竜やん教えるにゃー！がおー！！」などと陽まで言い出した。

「知り合いだよ」と竜哉が言つと、「それって、女か？」と、健・馬鹿は聞いた。すると、竜哉は、背後から殺気が膨らむの感じた。仕方がないので竜哉は電話の相手のこと言つことにした。

「『鴉』だよ」

「え？」

みんながきよんとする中、準一郎だけが即座に「電話の相手か」と答えた。

「そうだよ」

竜哉は、当たり前だといわんばかりに、さらりと言つた。

「おい、『鴉』ってあの、『鴉』か？」

ニヤーという語尾をも忘れて、驚きながら陽が言つた。だがここに未だ『鴉』という言葉がわかりきれていない者がいた。

「あ、あの『鴉』さんってだれですか？」と揚羽、そう揚羽が言つたのだ。

「あ、揚羽は知らないのか。『鴉』ってのは、裏では有名な殺し屋だよ」

翔は、揚羽に説明した。

「付け加えるなら、『中途半端な殺し屋、黒に染まりきれてない鴉』
って呼ばれてるのよ」

と百合が付け加えた。

「そんなことは置いて、なんの用なのよ。あばずれ」

「そうね、雄介がいないがまあいい。お前たちには仕事をしてもら
う。あと、色白、一言多いわ」

百合と楓の間に火花が散る。

「仕事って俺らなにするんだよ」

意外にもやる気の翔に健二が驚いて

「ん、翔。お前嫌だとか言わないのか」

「だるいけど、拒否権ないだろ、これ」

「まあな」

「で、天下の生徒会長様が私たちに何の仕事をさせるのかしら」

「もちろん、裏のだ」楓はシンプルかつ単純に言った。続けて、

「今夜あたりに侵入者が来る。その撃退だ」

こう言い放った。

すると、「じゃあ私と揚羽はパスね。私は1対多はむり、揚羽は戦闘事態無理でしょ」

「まあいいだろ」

「え！ちよつとそれじゃ5人でやることになるじゃないですか！！」

「数はいくつだ」

馬鹿の言葉をガン無視して準一郎は楓に聞いた。

「準一郎閣下、まだ怒ってるのか、おれが悪かったから許してくれ」

「五月蠅い！！」

この状況にばかんとした楓は竜哉に聞いた。

「何があった」

すると、竜哉はめんどくさそうに、（いや、いつもめんどくさそうではあるが）

「いろいろあったんだよ」と答えた。

「そ、そうか。ところで数は30人ほどらしい」

「なるほど、まあやれないことはないですね」

「そうか、じゃあ頼むぞ」

「へいへい」

「だるい」

「はゝ不幸だにやゝ」

「・・・・・・・・」

「俺は「じゃあ用も済んだし帰りましょ。行くわよ、揚羽」」

「はい、あつみなさん待ってくださいですう」

「・・・・・・・・あれなんだろ目から汗が出てくるよ」

馬鹿はそこにたたずんでいた。背中からは、哀愁が漂っていた。

そして、深夜0：00を回ったところで、屋上に4人の人影があった。それは、もちろん竜哉たちであった。

「陽の野郎逃げたな。だるいなゝ」

「しょうがないだろ。どうだ、来たか」

目をつぶった竜哉に準一郎は訊いた。

「まだだ。・・いや東側と西側に分かれてきた」

「よし、翔と俺は東側に行くから、竜哉と健二は西側に行け。ほら行くぞ、翔」

「えーだるいから準一郎だけでやってよ」

「五月蠅いこの怠惰やろう」

準一郎はそういつと翔の首をひっぱってつれて行った。

「ちよつ、準一郎やめろよ首絞まるから、息が、息があゝ」

「俺たちも行くか？」

「あ？ああ行くか。めんどくせえ」

そうして彼らは、それぞれの戦いの場へ向かった。

やる気のない者達は仕方なしに上に従う（後書き）

すいません能力出ませんでした。
なんで連続で投稿しました。

誤字脱字等があったら知らせてください。

無知は最高の餌であり餌は不気味を呼びよこす（前書き）

どうも片瀬 綾です。

今回は話の流れ上長くなってしまいました。

でもやっと能力出せた。

無知は最高の餌であり餌は不気味を呼びよす

ところかわって、ここはリグザリオン学園東側

「さて、世界の屑ども掃除に行くか。おまえら準備はいいか」

「「イエス！サー」「」

号令をかけているどこかの軍隊張りの完全武装したその集団とは違う別の真っ白な服装をしている集団と背中に逆十字が描かれた黒のコートを着ている集団が集まっていた。すると、完全武装している集団のリーダーと思われる男が、この場にいるもの全員に、「ここからは、全員私の指示に従ってもらういいな？」その問いに誰も何も言わない。

「無言は肯定と捉えさせてもらう。では、いくぞ！」

彼らは、そろそろと、学園の東の森に入って行った。彼らが、森に入ってしまったが罨どころか警報の1つも鳴らない。だが、進まなければならぬ。そうしなければいけないからだ、そう彼らは思っている。しかし、彼らはここで白い服装の集団のリーダーらしき青年が言った言葉に驚愕し絶望した。

「It might already be good if coming here. You are already ending for. Please die. Ah you were cheated though one in the back was said. (ここまで来た

らもういいでしょう。あなたはもう用済みだ。死んでください。あ、後ひとつ言っておくけど君たちはだまされただよ。」

そう、それは死刑宣告みたいなものであるかのようにであった。なぜなら男が後ろを振り返ったそこに広がるのは、さっきまでいたはずの自分の仲間の死体だったからだ。そして青年は腰につけた西洋剣で、男を殺そうと斬りかかった。

「くそっ」

男は逃げるだがうまく歩けない。まるで左右の区別ができなくなっただかのごとく。そこで男は気づいた、いや、気づいてしまった。青年が能力者であることを。

「お、お前はのうりよ・・・」

言葉の続きはない、なぜなら、発生源が無くなったから。死んだから。

「Well, the nuisance disappear and, and is going to attempting as for ability of the ability person in Japan. (さて、邪魔者は消えたことだし、日本の能力者の実力を図りに行きますしう。)」

白い服装の集団は、半月が浮かぶ夜の闇に消えた。背中に逆十字が描かれたコートを着ている集団も彼らとは、別行動をしていた。その集団はなぜか生気がないようにも見えた。白い服装の集団が、東の森の半分くらい過ぎたとき。彼らの目の前に、大きな光と轟音が輝き鳴り響いた。彼らの、何人かは地面に伏せている。が多くはま

だ立っている。あの青年も平然と立っている。彼らの誰かが叫ぶ。

「It is who.（何者だ！）」

すると、木の上から声がした。

「どーもっす。おたくらが侵入者？いやー最初のもで・・ひーふーみー・・ありや4人しか倒れてない！？こりゃ予想外に強いかな。まあ負けるつもりないけど」

そう木の上にいるのは、狩野健二その人である。最初の一発は健二の能力『エレクトロニクス電子人間』は電子を操る能力である。その副産物の電氣を使った簡易版スタングレネードを作って放ったのだ。健二を見た彼らの反応は、恐怖でも油断でもなかった。ただ単に武器を構えて健二を見ていた。

「えーとそっちがしないならこっちから行かせてもら・・」

その先の言葉が言えなかった。頭の中がぐるぐるとしたからだ。先刻のあの男と同じ状況だった。

「だれだ！くそっ」

「ボクダヨ。ジャパニーズ」

あの青年がしゃべる。

「あ、あ」

健二が青年をにらむ。

「クク、ダカラボクガヤツタンダヨ。マツタクワザワザニホンゴデハナシテアゲテルノニ、ヒドイナー」

大げさに肩を落とした振りをする青年。剣を鞘から出し戦闘に入ろうとすると、健二が叫ぶ。

「片言だけどな!!」

そういうと、足に電気を纏わせて青年にありえない速度で近づく。

「ヘエー。ボクノノウリヨクラムシシテ、イヤムリヤリカ。ククククツオモシロイヨ!オモシロイ!」

青年がそう言うのと、懷からマントを出して前に放り投げたそして

「It is already a withdrawal
is time. It was possible to
enjoy it enough. There is a
sleeping guy the collection... too.
(今回はもう撤収だよ。十分楽しめたからね。寝てるやつも回収し
ていてね。)」

健二はマントに直接当たり前が見えなくなり森の中をごろごろと転がって行った。そのうちに青年達は音もなく撤退していった。その頃竜哉はというと、屋上で森の中が光るのを見ていた。

「あーあの馬・・・健二張り切ってるな。ん?招かれざるお客さんが来たか」

背中に逆十字が描かれたコートを着た集団の目の前に竜哉は降り立った。

「一応言つが抵抗せず捕縛される気はある・・・っち」

竜哉が言い切る前に彼らあの中の一人の男が手にナイフを持って竜哉に襲い掛かってきた。だが、

「人の話を最後まで聞けよ！」

すると、男は地面にめり込んだ。しかし、男の動きは止まらない。

「&%¥\$#~~~~!!!!!!」

訳のわからない言葉を発する。そして、全身から大量の血が出ているにもかかわらず動き竜哉に向かっていく。それを見た竜哉はある人物が頭によぎった。（これは！？まさか・・・いやそんなはずない。そんなはず）

「くそっ！！」

向かってくる男に向けて竜哉は右手の手のひらを向けた、すると掌の空間が歪み黒い黒い球体のようなものが出てきた。

「さあ食らい尽くせ」

その黒い球体は手のひらから男に向かって一直線に飛んで行った。黒い球体と男が接触した瞬間この世とは思えないほどの奇声が鳴った。そして、残ったのは黒い球体だった。だが形状が違った完全な球体ではなく多角形の集まりのような形状になっていた。男の方は、

干からびて、風が吹いた瞬間灰となって消えた。

「おい、出てこいよ。」

そう竜哉が言つと集団の中から青年らしき人物が1人が前に出てきた。

「お久しぶりですね。くすっ」

「俺は会いたくなかったけどな。てえめー何の用だよ」

「いえいえ、僕たちの目的はただ一つですよ。くすっ」

「へえー、まあおれには関係ないが、なっ！」

竜哉は先ほど放った黒い球体を男に当てる。しかし、

「無駄ですよ。あなたなら私の能力を知っているはずですよ。くすっ」

「そうだな、てめえーの本体がここにもないことも知ってるよ。だがこれは殺しておくべきだろ」

次々と彼らを殺すもとい消していく竜哉。

「これはこれは、ちょっとやばいかな。まあ君に会えただけでも良いとしますか。では。くすっ」

「まで！！くすっ」

（それよりあいつ生きてた）

そこで、敵がいなくなったことと時間がたったことにより頭が冷えた竜哉は気づいた。

「おい、出てこいよ」

だから、出てこさせた。そいつを殺すために。

「いやはや、この私に気付くと」

「お前だけじゃなくてその後ろの空間にいる兵隊どももだよ」

その言葉に、出てきた赤と白のスーツを着た若い男は驚いた風に腕を上げた。

「おお！？そんなこともわかるんですか。さすがですね。いいですよ」

「ヒラケ」

その一言で空間に歪みが生じ中から5人ほどの完全武装した奴らが出てきた。そして「みなさん、やっちゃってください」そんな一言が合図だった。一斉に手に持ったサブマシンガンが火を吹いた。そんな状況なのに竜哉はよける動作一つしない。

「はぁー、それ無駄だから」

竜哉が言った途端彼の目の前の空間が揺らめくと銃弾はその中に消えて行った。

「なに！？どういうことだ」

男たちは混乱する。

「あーこれ要らないから返すけどいいよな」

またも竜哉の目の前が揺らめいたかと思うとそこから先ほどの銃弾が出てきた、男たちに向かってだが。

「う、うわああー」

彼らに防ぐことはできず銃弾に倒れる。

「いやあーこれは私の見当違いですかね。これは」

動かなくなった男たちを踏みながら竜哉に近づく赤と白のスーツの男。

「てめえ、だれが動いていいって言った？」

その瞬間、男は地面に何かに抑えつけられてるかごとくうつ伏せで倒れた。

「ふむ、なんの能力でしょうね。あなたh」

「だから、しゃべるな三下」

男を見下す竜哉。

「そのまま圧死しろ」

鈍い肉を潰す様な音と骨が碎ける音がしその音が鳴らなくなったその場に残ったのは肉の塊だった。

「おい、竜哉終わったのか？」

健二が戻ってきた。

「ああ、一人逃がしたかな。お前こそどうだったんだよ？」

竜哉は健二の方を見ずに訊く。

「あー俺は逃げられた。全員に、てへっ」

ブチッ何かが切れる音がした。

「ほー、あんだだけピカッというて逃げられたんだ」

「いや、あっちにも能力者がいたんだよ。強い奴が」

こういったやり取りをしていたら、遠くから準一郎の声がした。

「おい、お前たち無事だな」

準一郎に首根っこ引っ張られている翔もいる。

「ゴ、ゴホゴホ。竜哉たちには、何が出た？」

翔が咳き込みながら健二に聞いた。

「白い服装の奴らがいたんだって。確かクイーンズイングリッシュだったからイギリスさんだと思っぜ」

「白・イギリス・なるほど白騎士団か」

竜哉がつぶやく。

「え、なにそれ、なにそれ？」

翔が食いつく。

「あー、イギリス政府お抱えの能力者が所属する部隊だ」

「ふーん。そうなんが混じってたのね」

翔は興味が無くなったというように、目を閉じた。

ここで、「そろそろ、戻るか」と竜哉が言ったところで「ちょっと待ちなさい。竜哉」仁王立ちした楓がいた。

「なんすか、会長。」

「やはり、竜哉！おまえを生徒会に入れる。拒否権はないからね」

「は？会長何いつてるんすか」

ぽかーんとしている竜哉そこに追い打ちをかけるように

「だから、竜哉は私の生徒会に入りなさいと言っているのよ」

それに対し竜哉は、「なぜ、おれが？」

「今ので、説明はつくだろ、それに、おまえは私に勝った。だからよ」

「さいですか」

このやりとりを見ていた三人は、一同こう思った【俺たちって何か意味あつたかな】と。

「で、俺はランク？つすよ。そんな俺が入ったら、問題になりますよ」

「それに関しては大丈夫よ。裏をやってもらうし、極秘に入ってもらうから」

そんな完璧なことを言い出す楓に対し竜哉は折れて「分かったよ。はあー、めんどくせえ」

すると、楓の雰囲気が変わった。甘ったるいかんじに、そして

「いいじゃない、私と二人っきりの時間が増えるのよ。最高じゃない。私はそっちが重要だけどね」

何とも甘えた声で楓が言う。

「どこが。俺にメリット1つもないし。つーかもう帰ろっぜ」

「そうね」

「「「あれ？・俺らマジで空気じゃね」「」

そう思う三人だった。

無知は最高の餌であり餌は不気味を呼びよこす（後書き）

誤字脱字等があったら送ってください。

あと感想もまっています。

動き出す死の遊戯と変な厄介事（前書き）

どうも片瀬 綾です。

動き出す死の遊戯と変な厄介事

翌日

「ふー、眠い」

この日もさぼる竜哉であった。いつもと変わらない日常だった。これからも続くと思った。だが、こんな幻想もいつかは終わりが来る。そして、螺旋は廻るいつまでも。歯車がそろったその時に。

真夜中の街中、男が歩いていた。

「ふー、疲れた。当主様張り切りすぎだろ。全く」

この男名を孔雀晴明といい、九鳳院家の分家に当たる者だ。そして彼は、分家の中でもトップクラスの実力者でもあった。彼は、当主にこき使われて、帰りがこんなに遅くなっているのであった。そんな彼は背後に一瞬の殺意を感じ「誰だっ」と叫んだ、すると、電柱の影から人影が出てきた。

すると、そいつは晴明に向けてこういった。

「あなたは強いですか弱いですか。どっちですか？」

その瞬間、その人影は消えた。しかし、彼も素人ではない、すぐに、戦闘準備に入り、相手を見定めようとする。だが、

「なっ、なんなんだこいつ。くそ、こいつ人間なのか?！」

その瞬間、漆黒の闇に紅の花が散った。そして静かになった街中で人影は、囁いた。

「まだ終わらない、このゲームは。次の相手は誰かな」

そして、闇に埋もれた町には、歪んだ笑い声が響いた。

閑話休題

朝早く教室にいた良は隣にいる瞬に話しかけた。

「おい、瞬聞いたか」

「え、何のこと？」

すると瞬は、首を傾げて聞いてきた。実はこの姿を見て興奮してしまった女子がいたがここでは割愛しよう。

「何のことって、今朝聞いてないのか」

半ばあきれながら良は瞬に聞いた。

「ん、今朝っていうと・・・あ！父さんが言ってた、六大家をねらってるってやつか」

「そ！それでなんだけど、やられたのって九鳳院家の分家の中でもトップクラスの能力者だったらしい」

良がいつになく真剣に話す。

「へえー、ってかそれどこから手に入れたの」

「ちよつとな。でも問題はそこじゃねえ、やられかたが一方的だったらしい」

「ふーん。で、それが」

瞬はさもどうでもよさそうに返事する。

「それがって、もしかしたら俺らにもくるかもしれないんだぞそいつ」

そんな瞬の態度に焦る良。

「だったら、倒すか、倒せなくても適当にやって逃げればいいじゃん」

何も言っても無駄と判断する良。

「ちよつ、おまえ。まあいいか。とりあえず言っただけなら」

そう言うとは自分は自分の席に戻っていった。瞬はそのとき、気づいていなかった。これから起こることを。自分がその事件歯車の1つであることも。

その頃・・・竜哉は学園・・・・・・・・ではなく、別のところにいた。廃墟になった雑居ビルにいた。

「おい、おっさん何のようだよ」

「ようやく来たか。竜哉」

そこには、レザージャケットを着た男がいた。

「今回は、六大家からの依頼だ」

六大家という単語に、一瞬眉がぴくつとあがる竜哉

「はああ？なんで六大家から依頼が来るんだよ。いくらでも強いやついるだろ。まあ雑魚だけど」

一言余分に言う竜哉であった。

「竜哉、おまえはこの前の事件を知っているか？」

「えーと、六大家の分家の一人が殺されたって言うやつ？」

「そうだ、それに対し六大家が救援として我々に依頼をした。そしてその会合におまえが行け」

「え、えーと拒否権は？」

何としてもやりたくない竜哉。

「ない、上司命令だ。それに、お前を助けたのはだれだったかな」

意地の悪い笑みを見せる男。うざそうな顔になる竜哉。

「分かりました。はぁーめんどくさくなってきたなあ」

強制的かつ脅しに近い方法で納得させる男。心底めんどくさそうに竜哉は、顔を歪めた。

「安心しろ、魁も行かせる」

「これまた、何かが起こらなきゃいいけど。」

そう言いつつ、携帯を取り出して、どこかに電話する。“もしもし・
・はいおれですけど、・・・はいそうですそれをお願いします。
・
・はい、さよなら”気がつくと、男はすでにいなくなっていた。

「はぁーめんどくせー」

竜哉はとぼとぼ、と帰って行く。

数日後、学園内にて

生徒会室には7人の男女がいた。その一人であり天下の生徒会長である、九鳳院楓は言った。

「今回集まったのは新しく入る人を紹介するためです」

そのとき、「会長、やっぱり俺もはいらなきゃいけないんすか」

端から見てこいつやる気という物をどこかに置いてきたんだな的な感じにだらけている竜哉が楓に最後の抵抗をした。しかし、相手は天下の生徒会長答えはもちろん「当然！」

すると、その場にいた生徒、壁に凭れていた東紅葉が「会長、失礼ですが彼はランク？です。少々場違いでは？」それに続き窓際に立っていた亜城麻白が「そうです！彼の实力ではここにはふさわしくありません」そう、早速非難してくる現生徒会メンバー。

だが、「だったら彼と戦えばいいじゃないそうすれば納得するですよ」

その意外な答えに一瞬うろたえた二人だがその中心となっている男が平然と言う。

「会長、それって俺が戦わなきゃいけないじゃないですか。めんどくさい」

その答えるが、

二人は、「いいでしょう私が亜城さんのどちらかが戦って彼を見極

めればいいと言つことですね
それに楓はというと。

「ええそうよ。会長権限でを許すわ」

「おい、俺の意志はどうした」

「あ！そうそう二人を紹介するわ。こちら新入生代表の葛城鮮花さんと朽花良君よ」

そののんきに、鮮花たちを紹介した。竜哉は、もう何も言わなかった。そんな竜哉に、楓の右手の副会長である木之本司きのもとつかさが近づいてきて。

「君も大変だな」

と声をかける。彼は竜哉を知っているほうの人間だ。もちろん能力とか。

そして、声をかけられた竜哉はというと。

「そう思うなら、助けてくださいよ」

と懇願すると、

「それは、やめておくよ。僕は、厄介ごとには首は突っ込まないことにしてるからね」

「ほんと、会長と反対ですよね」

そんな感じで司と話していると、「ちょっと、竜哉聞してるの！-！」

と楓に注意された。

「聞いてマース」

やる気がない返事をする竜哉。

そんな竜哉の姿を憐みの目で見る司であった。

そんなこの部屋の中で一番戸惑っている新入生2人は生徒会室の隅のほうに移動していた。

「なんか、険悪だな」

「そうね、それにしても、奥村先輩、やる気なさすぎですよ。あれじゃあ、言われてもしょうがないと私は思いますね」

「うん、それは俺も思う。奥村先輩ある意味尊敬に値するわ」

と言った会話をしている。

変な方向に向かっている事柄、それに巻き込まれる竜哉、残念ではない。

動き出す死の遊戯と変な厄介事（後書き）

誤字脱字等があったら教えてください。
感想も待っています。

幕間く力を求めた少年の物語く（前書き）

どうも片瀬 綾です。

よろしくお願いします。

幕間―力を求めた少年の物語―

むかしむかし・・・というほど昔ではないがちよつと昔。

ある少年がいた。

少年はただただ無力だった。無力でしかなかった。

だから少年は力を求めた。力を渴望した。

少年は周りの人々を見て思った。

ドウシテボクニハチカラガナインダドウシテボクダケ……
ダレニモマケナイチカラガホシイ、ホシイ、ホシイ……

少年は少しずつだが堕ちようとしていた、

しかし彼の本来あった優しさと少しの愛で彼はもっていた。

それはとても繊細で微妙な均衡で保っていた。

だがその均衡も崩れ始めるときがきた。

少しの愛をもらっていたその根源を失い、さらに少年は見放された。
彼の周りのすべての人に、その日を境に少年は周りの人間はすべて
敵、

自分を貶すものだと思うようになった。

それからというと少年は以前よりも力を欲した、渴望した。
あらゆる書物を読み、あらゆる方法を試し、あらゆることに手を伸ばした。

しかし、少年は極めることどころか成功すらしなかった。
世界に絶望した。

ナゼ、ナンデ、ドウシテボクガナニヲシタノボクガ。
カミサマイルナラボクニチカラヲクレヨ。

チカラヲ、チカラヲ、チカラヲ、チカラヲ、チカラヲ、チカラヲ、
チカラヲ、チカラヲ、チカラヲ、チカラヲ、チカラヲ、チカラヲ、
チカラヲ、チカラヲ、チカラヲ、チカラヲ、チカラヲ、チカラヲ、
チカラヲ、チカラヲ、チカラヲ、チカラヲ……

徐々に壊れていった、徐々に堕ちていった、徐々に闇に飲まれていった。

力を求めるがゆえに少年の心は黒く染まっていった。

ある日、変化が起きた。

少年が世界の片側に触れた。裏側を見た。
世界の真理を見た。

そして、少年は力を手に入れた。しかし、その代償は決して小さいものではなかった。

少年は力を手に入れるとともに死が近づいてきた。少年は願ってしまった。

シニタクナイ、マダシネナイ、イヤダ、イヤダ……

そう願ってしまった。この願いは別の意味で果たされる。

彼が手に入れた力でその願いがかなえられたのだ。

それから、少年が力を振るうたび心と体の両方が傷ついた。

少年が最もほしがってやまなかった力が手に入ったにもかかわらず。

少年は心は堕ちて、堕ちて、堕ちてついには最下層に堕ちてしまった。

そこで少年は嘆き、悲しみ、そして人々の心の奥底の奥底を見た。それと同時に少年に希望の光が一筋現れた。

少年は縋った光に。

しかし、すでに少年は心身ともにボロボロだった。

でも少年は諦めなかったそれが少年の本質の1つだから。

そしてそれからどれだけ経っただろうか少年は力を使いこなすことができた。

いや、自分を墮とさない力の使い方を手に入れた。

その頃から、少年は、体に赤い赤いしるしがついた。

それは彼が人を殺し殺し殺しころしころしころしコロシコロシコロシ殺し尽くしていたから。

少年は心の奥底にあるたった一つの大切なものを守るため、闇に墮とさないようにするため、

自分が墮ちないために、力を使った。

そのためにたくさん死んだ死んだしんだしんだシンダシンダ。

だが少年は狂わなかった、少年は冷静に狂気をを飲み込み自分のものにしてしまっていた。

人を殺すたびに狂気を飲み込んだ。内に溜めた、心の奥底に、まだ正常で清らかな心で蓋をして。

狂気が表に出てくる条件は、彼が墮ちたときまた出てくるだろう。墮ちて墮ちてまた最後まで墮ちたらもう彼は彼ではなくなり狂気となる下がるだろう。

そんな危うい心を持ちながらも生き清さに憧れる。もう自分はなれないとわかっていても。

少年は世界の真理と縁をつないだこのことは少年だけではなくほかの者の物語にも影響するもしくはしただろう。

例えば

数奇な運命をたどる双子とその仲間達の物語。

あらゆる手を使ってでも友人を裏切ってもでも尊敬する人を助けようと奮闘する青年の物語。

完全でありながら不完全、聖地を守る守護者の女の物語。

世界の真実のかけらを見てしまったがゆえにほかのものとは異なる青年達の物語。

孤独の中で発狂し覚醒し孤独に苦しむ女の物語。

自由を求めそれゆえに自由になれない男の物語。

少年と道をたがえた死体漁りの少年の物語。

これらのほかのさまざまな物語に影響を及ぼした少年の物語。

幕間く力を求めた少年の物語く（後書き）

誤字脱字等がありましたいってください。
後感想もくれると嬉です。

後何話かで第一章は終わります。

世界の声聞くとき力は解放される（前書き）

どうも片瀬 綾です。

感想とかくれるとうれしいです。

世界の声聞くとき力は解放される

色々あつて体育館にて。

集まつた現生徒会メンバーと新生徒会メンバー、そして入る予定(?)の竜哉。

「さて、はじめましょう!!」

元気よく言つたのは楓それに対し、やる気のやの字すら見えないそんな顔をしている竜也。

当然そんな竜哉に、非難はかかるわけであつて。

「君!! 戦う気がないのか!」

東が竜哉に文句を言う。まあ当然ではあるが。

そんななか竜哉はやる気のない目で東を見たあと、楓に、こう言つた。

「3分以内で倒せたら、今度なんか奢ってくださいよ。会長」

それに楓が「しょうがない、3分以内だからね」

それを聞いた東は、プライドを傷つけられ怒っていた。

そんな、彼を見る竜哉の目に赤い赤い逆十字が浮かんでいたとは気づかずに。

「雑談も終わりにして、始めるわよ」

東と竜哉は体育館の中央に互いに向き合うように立ち、始まりの合

図を待っていた。

そして、楓が能力で空気を鳴らしてピーという音を出した。

それが始まりだった。最初に動いたのは、意外にも東だった。東の能力は『ペーパークラフト神様の工作』

紙を自在に操る能力で、紙一枚で鉄を簡単に切ることもできる。

また、飛ばして投擲武器としても使える便利な能力である。

そして、東は、硬化させた紙を数枚、竜哉に向けて投げた。

紙は、一直線に竜哉に向かったが、竜哉が、指を鳴らした瞬間紙たちが竜哉の前で別の空間に消えた。

すると、竜哉は東に向かってまるで手品師のように一礼し、手を広げこう言った。

「見ての通り、種も仕掛けもありません。俺に遠距離武器は効かないぞ」

もう一度指を鳴らす、竜哉の前の空間が歪みその中から先ほどの紙たちが一斉に東に向かっていった。

「これはいらなから返すわ」

それに対し、東の反応は。

「なるほど、これはめんどくさい」

そう言いつつ紙を日本刀の形にして、向かってきた紙たちを切った。

「今度は、俺から行かせてもらっぞ」

そう竜哉が言った瞬間竜哉の目が赤く光り逆十字が大きく浮かび上

がってきた。

《世界に問う。我に力を貸せ。》

竜哉の口から竜哉ではない声が聞こえてくる。

《受理された。実行する。》

その瞬間、竜哉の背中から黒い、いや漆黒の炎が出てきた。

その漆黒の炎はやがて翼のような形に変化した。

その黒炎の翼をブースターのように噴出させ東に近づき殴りにかかる。

しかし、東とて生徒会に入るほどの実力である。

紙一重でよける。

「この程度なのかい。奥村、君！」

紙の刀で竜哉を切りつける。

だが、この攻撃を竜哉は背中の中黒炎の翼をうまく使いよける。

「まっ、さすが生徒会に入っているだけはあるな」

「それはど、う、も！」

なおも竜哉に切迫する東。

またもうまく黒炎も翼を使い空中に一回転し空中に逃げる。

これに対し東は紙を鎖のように伸ばして竜哉を捕縛しにかかる。だがここで終わる竜哉ではない。

「すべてを燃やし朽ち果てさせろ」

そう竜哉が命令したその瞬間、背中の炎は広がり東が放った紙の鎖もろとも黒炎の濁流に飲まれ、そのまま東に向かって黒炎の濁流が押し寄せる。

「くそっ、これでどうだ」

東は紙を壁のようにに変化させ炎を防ごうとする。

しかし、所詮は紙、炎に勝てるはずもなく燃えていくだが漆黒の炎は勢いを止めない。

東は腕を顔まで上げ交差し身構えて炎の直撃を覚悟したが、ぱちんっ。その音とともに炎は消滅をした。

「へ!？」

いきなりのことで驚く東。

「東君、隙できちゃってるよ。戦いの最中なのにね」

その一言が東の耳にいやに響いた。

東が後ろを向くと竜哉に顔面を殴られた。

その戦いを観戦していた楓たちは楓以外は啞然としていた。

「楓さん、あれは何をしたんですか？」

その中で早く現実に戻ってきた良が聞いた。

それに楓は、考えるように腕を組んだ、しかし、その答えは予想とは違った。

「あー竜哉に聞いて、能力ことだから」

「えー、分かりました」

しびしびといった感じで引き下がった良。

そして、戦いを終えて戻ってきた竜哉の目は先ほどの逆十時は消えており、もとのやる気をほとほと感じさせない目に戻っていた。そこに良が聞きに来た。

「奥村先輩、あれ何だったんですか」

遅れて鮮花も竜哉に近づいてきた。

「あー、企業秘密かな」

濁す竜哉。しかし、

「えー、教えてくださいよ、むしろ教えろー！」

横暴なことを言ってくる良。

「まあまあ、良君落ち着いて。先輩にも事情があるようだから、ねっ」

「あ、鮮花が言うなら仕方ないかなあー。はははー」

そう、笑顔で言ってくる鮮花に良は、若干顔を赤くしながら引き下がった。

そして、竜哉は、（こいつ、鮮花に惚れてるな。）と過去の自分の妹とを見ながら思いに深けていた。

そんなこんなで生徒会に入ってしまった竜哉であるが、この後、この戦いが3分で済んでいたことによる奢る、奢らないという会長とのいろいろなやりとりがあったことは別の話。

世界の声聞くとき力は解放される（後書き）

誤字脱字等があったら報告してください。
感想、アドバイス等もくれると助かります。

6つの星は2つの特異点とあいまみえる（前書き）

どうも片瀬 綾です。

文章も拙いですがよろしくお願いします。

6つの星は2つの特異点とあいまみえる

とある満月の夜

高級料亭の一部屋に6人の男女がいた。

「まだなのか、12使徒の連中は」

そう甚平を着た50代前半であろう男性……

朽花歩くちはなあゆむは言った。

「そうね、約束の時間は過ぎてるのにね」

呑気に歩の言葉に応えたのは、……九鳳院久遠くほういんくおん、40を過ぎているのにもかかわらず未だ楓と並んで歩くと姉妹と言われるほど若々しい黒髪美女。

そのほかにも、目をつむって瞑想している男性……葛城真かつらぎまこと。

久遠に相づちをしている銀髪の女性……近衛満里奈このえまりな。

なぜかダンベルを上げ下げしているマッチョな男性……遊馬旋士ゆうませんし。
機嫌の悪い歩を宥めているメガネをかけたスーツ姿の男性……不知火陣しらぬいじん。

そう、彼らは六大家現当主たちであり、この場合は緊急の会議の場である。

そして、彼らが待っている、12使徒の連中はというと……部屋の建物の外に竜哉ともう1人20代前半に見えるアッシュグレイの髪に茶髪のメッシュを入れたの男もとい近衛魁このえかいがいた。

彼は名前から想像できるように六大家出身である、それも本家の。

だが、竜哉とは違い幼い頃から才能があり次期当主候補No.1とまで言われていた男である。そして決して落ちぶれたわけでもない。彼の場合かなりの変わり者であり18の時に家に束縛される人生を嫌い家出をしたという過去を持つ男である。

今回の依頼は六大家からの物であるので同じ六大家出身の2人に行けと言う命令が下ったのであるのだが、彼らはと言うと。

「いや、無理だつて。魁1人で逝けつて」

「いや、字違うし行くの字が。俺が1人で行ったらそれこそ会議どころじゃねえて。マジで!!」

揉めていた。しかもどっちもどちらか一方を行かせようとしている。

「いやいやいや、俺こそ1人で行ったら会議とかそう言う問題じゃなくて殺し合いしなくちゃいけなくなるって。マジで」

絶対無理!とでも言うように魁と同じように力説する竜哉。まあ結局のところ2人のどちらかが行っても問題になるのだが。もう疲れたのか無意味と悟ったのか魁が折れた。

「もう、覚悟決めようぜ竜也!」

親指を立てて竜哉に言う、その目には一粒の涙がそれを見た竜哉は、若干引きながら

「…… はあーめんどくせえ」

いつもの口癖をいいながら魁とともに建物に入っていった。コンコン、ドアがノックして、部屋に入る竜哉と魁、その2人の顔

を見た瞬間顔色を変えた人物が二人、その二人はもちろん葛城真と近衛満里奈である。だが、真は、すぐに顔を元に戻し平然としている。しかし、もう一人はと言うと

「こ、この、馬鹿息子どこにいつとたんじゃー」

とおもいつきしグーで魁を殴った。

「ぐへ、お袋待ってくれ、ちよつ待つてその握り拳をこっちに振りかぶらないでこっちの話を聞こうよ」

「五月蠅い」

一言で片付けられる魁。そして殴られる。

「満里奈さんそこまでにしといたらどうですか。このままだと息子はんしんでまうで」

ここで不知火陣が止めに入る。竜哉もさすがにこれには止めにかかる。普段ならしないだろうが。

「そうだぜ、近衛家の当主様。」

「そうね、馬鹿息子は後にして、その君名前は？」

「おつとこれはいけないいけない。俺の名前は今は奥村竜哉です。12使徒序列第七位です。そのくたばってるのは近衛魁、第四位です」

竜也の言い回しに朽花歩は怪しみ、そして訊いた。

「青年、今はと言ったなその名前は偽名か？」

「まあ偽名っちゃ偽名ですけど半分。本名言ったらあんたらびっくりすると思うから俺なりの心遣いですよ。とはいえ本名名乗るつもりはないですけどね」

フツと笑いながら言う竜哉であつた。

「そんなことはどうでもいいんで、俺たちの依頼ってなんすか」

復活した魁が冷静に彼らに聞いた。まあ予想済みだがな、と付け加えて。

「私たちの依頼は、あなたたち12使徒と共同である人物を捕縛もしくは殺してほしいの」

久遠は、そう竜哉たちに言い放つた。

それに対し竜哉は、

「まあそうだろうな、相手は六大家狩りなんて言われてるやつだ。六大家限定の能力を持つてるもしくは手に入れてるなら、いくら実力者揃いとはいえ危険だもんな。その点俺ら12使徒なら確かな強さもあり六大家とは何も関係がないと。まあそこに関係者がいるがな」

と魁を横目で見た。

魁は、おまえもだろ、と目で訴えてくる。

「これは、驚いたこんな若い青年で大丈夫かと思ったがずいぶん頭が
ぎれるようだね」

わざとらしく朽花歩は言う。

「ご託はいい。そいつの写真はあるのか？」

魁が真剣モードで彼らに問う。

「写真はないが記憶はある。」

「なに？どういうことだ、遊馬の当主」

魁が未だダンベルを上げ下げしている遊馬旋士を睨んだ。
すると、

「こういう事だ」

「「なっ！？」」

竜哉と魁は、いきなり頭の中に流れる映像に驚いた。

「これは、テレパス！？」

竜哉は驚いた、なぜならこのテレパスは、旋士の記憶では無く別の
人物の記憶である。しかも、その人物が死んでいるとなると記憶の
読み取りは一気に難度があがる。

このとき、竜哉はこれが当主の実力だと理解した。

その後、様々な約束事などが交わされ、結果、竜哉と魁の二名が協

力することになった。本題の会議が終わり解散かと思われたそのときだった。

「奥村君と言ったかな。青年、君の本名を覚えてくれないか。依頼者側としては、はつきりさせときたいからな」

歩が発言し、それに、対し竜哉は一瞬真を見て

「まあそれは分からなくはないかな。しょうがないなあ。俺の本名は、…… 葛城竜哉ですよ……」

驚く周囲、平然とする真、他人事だと傍観を決め込む魁、反応は三者三様であった

「……「なっ!?!」「……」

「どういう事だ、真!?!」

「あーそれは俺が話しますよ。それでいいでしょ、お父様?」

竜哉は口元をゆがませた。

「かまわん」

「俺は、8年前勘当されたんですよ。俺は、能力の発現が無かったですよ。それで、家では落ちこぼれて言われてたんすよ」

まあいまは能力が発現してますけどねと笑いながら竜哉は言った。

「じゃ、それだけなら俺らは帰らせてもらいますわ。いくぞ」

魁は竜哉を引っ張って帰って行った。残った部屋には何とも言えない後味の悪い空気が残った。

翌日

竜哉は早速探索を開始したかにみえたが・・・・・

・・・・・

部室のベッドで寝ていた。

すやすやと寝ている竜哉に迫るくり影。

「おい、てえめえ、起きろ！ 依頼やるぞごらあ」

魁だつた。

「うるさい、黙れ」

それを聞いた魁は、無言で竜哉の布団を奪いとった。

「あ、うーん何か足りない。って布団ないし。誰だよ布団取ったやつ」

「おーいこっちだこっち」

「ん、なんだ魁か。死ねそして俺の布団返せ」

「いやいや、お前を起こしに来てやったのにその反応かよ」

魁は近くにあつたイスに座りながらしゃべった。

「何のようだよ。ふあーあ」

平然とあくびをしながらしょうがなくといった感じで起きてくる竜哉。

「何のって依頼だよ依頼」

「ん、あーそんなのあつたな」

「おまえ忘れてたな」

ジト目で竜哉を見る魁。

「ソナナコトナイヨ」

「何で片言なんだよ!？」

「……………今日はいい昼寝日和だと思わないか、ワトソン君」

「何だよ今の間、それと俺はワトソン君じゃねえー!!」

「そうだったな。で依頼のやつってどこに表れるわけ」

「いきなり真面目!？」

そう言いつつポケットから手帳を出してるあたり常人ではない。

「あー、そいつが出現する場所に規則性がないってのが六大家の判断だ」

「まあ、そりゃそうだろ、六大家ねらってるならその関係者をねらうわけだからふつうはランダムになる。だが、気になる点が1つだけある。最近起こった孔雀家のやつ」

「あれのどこが気になるんだよ」

「今までそこまで活動が活発じゃなかった。だが、今回は違った力を確かめるかのような殺し方だった」

「確かに、あの殺し方は特殊だったな。だがそれだけじゃないのか」

「俺が気になってるのは、それと、夜って事だ」

「夜？」

魁が首を傾げた。

「ああ、今までの犯行のすべては夜に行われた。」

「いや、だからって夜に動くとは限らないだろう?」

「まあ、普通はそうだが今回は違う、相手は六大家だ。その関係者を殺すとなればよほど腕が立つやつか、もしくは……」

「もしくは……」

「何かの罠もしくはそのための条件がある。この場合おそらく夜という時間条件によって能力に関係と言うよりも六大家に対抗するためにも空間的にも有利にするものだろうな」

「それが夜という訳か。でそうになると対象は夜動くと言う風になるな」

「ああ。だから魁は、夜まで待機しとけ」

「オツケー、分かったぜ。それと、隠れるならうまく隠れよな、少年少女たち」

そう言つて魁は音もなく消えた。すると、部室のドアが開き、雄介たちが入ってきた。皆一様に苦笑いをしていた。

「おまえらどのあたりから聞いていた?」

そう竜哉が笑顔できいてきた。だが、雄介たちには、竜哉の後ろに般若がいたと後に語っていた。

「いや、『おいてえめえ、おきろ……』のあたりからかな」

そう、健二が言つと。

「って最初からじゃねーか!」

とりあえず健二をボコル。

「それより、さっきの奴って使徒のメンバーにやのか?」

陽が近くにあるイスに座る。

「まあな、近衛魁、序列4位だよ」

「おい、近衛って六大家じゃんお前はともかく、そんな奴が使徒のメンバーやってのか」

「あいつは例外中の例外。自分から家出した変人だよ。まあ、使徒のメンバーは変人しかないけどな」

ソファに凭れる翔とまた、寝ようとする竜哉。

「近衛家の人ってたしか新入生にいましたよね」

「確かにいたな。」

「へえー六大家がねえ」

揚羽と準一郎と百合の3人が話していると。

「そいつ、魁の妹だぞ。たぶん、苦労したんだろうな。兄貴が家出していきなり次期当主になったんだからな。あいつ最低だな」

寝ているはずの竜哉が呟くといっても普通にここにいる全員に聞こえたが。

「確かに、それより竜ちゃん会長さんがよんでたにゃー」

すると、いきなり、竜哉は冷や汗をだらだらにかいて。

「マジで」

「まじで、ほら、これにゃー」

携帯を出して、録音機能をつかう。

《奥村竜哉、直ちに生徒会室に来い。早くすぐに、今すぐ、にだ》

これを聞いた竜哉は、引きつった顔をして、

「これ、いつに放送がかかった？」

と、陽に聞いた。

「えーと、たしか、昼だったかにゃー」

と携帯をいじりながら言う。

竜也が、逃げようとしたところに、部室のドアがあき、人が来た。

「竜哉はいるかしら？」

いわずもがな、天下の生徒会長九鳳院楓であった。

楓と竜哉の目が合う。…… 竜哉逃げようとする。

楓捕まえる。竜哉の耳元で、

「逃げたら、私と竜哉がつきあってるって言う噂を流す。むしろ、私の恋人にする！」

「おい、脅しというか願望になってるぞ」

竜哉は、首根っこ引つ張られ部室から出て行く。

何とも言えない空気が漂う部室内、竜哉がつれてかれていった扉の方を向いて合掌している3人。

もちろん、雄介、陽、健二である。

「達者でな竜哉。嘘だけど」

「会長かゝ、俺も連れてかれてえー」

「変態は無視して。リュウやんは災難だにやー」

そんな3人を冷めた目で見る百合と準一郎の2人、寝ている翔、せわしなく掃除をしている揚羽。今日もNSN部はいつも通りなのだ。竜哉は違うが。

6つの星は2つの特異点とあいまみえる（後書き）

誤字脱字等ありましたら報告お願いします。

感想等もらえると作者はやる気が上がります

。

鳥と龍が会うとき何かが起こる（前書き）

どうも片瀬 綾です。

鳥と龍が会うとき何かが起こる

ここ生徒会室にて、向かい合っている男女2名。

だが、この密室空間に男女2名の間には桃色の空気ではなく、剣呑な空気であった。

「先日の件は、どうだ」

沈黙を破ったのは楓だった。

「まあまあってとこっすかね」

竜哉はそう言いながら若干一步下がる。

「そうか、実はな、狙われる可能性が高い人物がわかったからそれを知らせておこうと思ってね」

そう言いながら楓は竜哉に一步近づく。

「へえー、それはありがたいっすねえー誰なんですか」

一步下がる。

「この学園の生徒よ」

一步近づく。

「ということば、会長とかですか」

一歩下がる。……壁にぶつかる。

「私かしらね」

一歩近づく。むしろさらに竜哉に近づく。

「教えてほしい？」

甘ったるい声を出しながら、さらに近づく。

「まあ、おしえ、て、ほしいかな？」

このとき竜哉の脳内ではこれをどうするか会議が高速で繰り広げられていた。

回答1 相手が何か言う前に畳み込んでおしまいにする。

「か、会長！！早く教えて下さい。この通りです」

竜哉は、手を合わせ頼んだ。

「い・い・わ・よ。竜哉が私の・「あーああー……」」……
・失敗。

回答2 だんまりを決め込む。

「・・・・・・・・・・」

「ねえ、竜哉何でも言わないの」

頬をつつかれる。我慢、我慢

「ねえってば」

つつく。ガマン、ガマン

「ねえーってばー」

なおも頬をつつく楓。がまん、がま……

「……うおーうぜーわ!」・・・失敗。

回答3話題を変えてみる。

「そついえば会長、最近近くにおいしいケーキ屋ができたんですよ」
さりげなく話題を変える。フェイズ1完了。

「へえーそうなんだ」。じゃあ、竜哉今度、一緒に行きましょう?」

「え!?・・・・・・・・・・はい」

ジッと見られ降参。ある意味成功、ある意味失敗。

「すみません、教えて下さい。今度ケーキ屋連れて行くんで」

仕方がないので竜哉の最終判断は先ほどのケーキ屋を餌にして教えてもらうことにした。

「しょうがないわね。可能性が高いのは、葛城鮮花、瞬、の二人と朽花良そして私の計4人よ」

すると、竜哉は考えるように眉間にしわを寄せた。

「おい、なぜ近衛優奈と遊馬鈴が入っていない？」

「それは、この学園の6大家中ので実力が高い順で判断したからだ」

「だが、それだけじゃないだろ」

竜哉は楓をにらむ。

「ああもちろんよ、有名であることも一因になっているわよ」

「なるほど。双子そろって実力がある、鮮花と瞬に今ではもう当主と同等であるとかないとかいう会長と朽花のやつか」

「そういうこと。で見つかった？」

「いや、姿は見えてないが、奴の残り香は見つけた。学園内でな。それじゃ俺そろそろ行くわ、仕事しないといけないからな」

そっいつて竜哉はそそくさとそれはもうすばやく生徒会室から出て

行った。

生徒会室に残された楓は呆気にとられていたがしばらくして

「ふふふつ、竜ちゃんとケーキ屋！やった！。覚えておきなさいよ。竜ちゃん」

ぞくぞくっ！！悪寒がした竜哉であった。

竜哉と楓が生徒会室で話していた

同時刻 某国 とある内戦地域にて、場違いのような格好をした5人の男女。

「うん、しよつと、さて始めますか」

最近の若者のような服装にチェーンを何本もつけた短髪の男が言った。

「そうね、ここでじつとしていいこと無いしね」

そう言ったのは、腰ほどまである金髪をたなびかせて、

どこかのパーティーにでも行くのかとも思っ真っ赤なドレスを着た女である。

「そうだな、さて始めるぞ、今回は能力者だけ殺せ、まあほかのやつもどうでもいいがな、なにかあるか」

そう、服の上からでも分かるような鍛えられた筋肉がある、レザージャケットを着た男はほかの4人に、言った。

「はい、殺す能力者に情報を絞り出す必要は？」

と、ブラウンの髪をボブカットにしているスーツを着ている女は質問した。

「できればしろ、できなければ別にかまわん」

「はい、どんな殺し方でもいいっすよね」

チャイナ服を着て、後ろ髪をおさげにしているまだあどけない顔をしているである男が陽気に言った。

「別に殺せばいい、もういいな、散れ！！」

「……はっ！！」「……」

そう言つて彼らは、戦場に向かった。

その実彼らの正体を言ってしまうと彼らは神聖12使徒のメンバーである。その名のとおり神聖12使徒は12のメンバーで構成されている。彼らの目的は不明であり、能力者関連の紛争および戦争に介入していることがわかつている。さらにいうと彼らは全員カテゴリーKであることがいえる。ちなみにわかっているであろうが竜哉と魁もメンバーの一員である。

ここは暗闇、何もない世界そこにある一人の男がいた。

「憎い、憎い六大家在憎い」

「そんな憎いか、六大家在」

どこからともなく特徴がない男が現れた。

「だ、誰だ？」

「いえ、私はただのしがないでありでありであるだけです。ちよつとばかりあなたに協力しようかと」

「なに？」

いきなり現れた青年に男は怪しげな視線を向けた。

「そうそう、あなたの復讐のための力と資料をあげますよ」

「見返りは何だ？なぜこんなことをする」

もちろん男は青年の言葉を100%信じることはしない。

「見返りは求めない。救いを求める醜いアヒルの子に無償の救いを、のが私の所属している組織での座右の銘なんですよ。」

それになぜと言われましても私は、
シナリオライター ゴーストライター コピーライター
演出家であり信念を持たない騎士であり贗作であるそれが理由です」

「それを信じるとでも」

「信じようと信じまいとあなたが今、力を求めている事実は変わらない。」

ゆえに私はあなたに力を与える」

そう男が言った瞬間周りが紫色の光で覆われた。

「これは、六大家の関係者に対してのみですがその代り絶対の力をあなたに与える。

その力を使って復讐を果たすなりなんなりしてください。

それとこれは六大家の関係者のリストです」

男の目の前にファイルを放り投げて消えた。

まるで最初からいなかったかのように。

「怪しい奴ではあったがこの力とこれはありがたく俺の自由に使用せてもらうぜ。くふふふふっ」

暗闇の世界そのなかにはただただ男の薄気味悪い笑い声だけが響いた。

その夜。

「めんどくせえけど眼、一応つけておくか」

世界に問う。我に力を貸せ。

異形の声が聞こえる。

受理された。実行する。

竜哉の後ろ何もなかったところが歪みそこから3匹の豚が出てきた。しかし、豚の容姿はふつうの豚ではなく体中に眼がありその眼がすべて蠢いている、異形のものだった。

「お前たち、行け！！」

ブヒっ、そう豚たちは鳴き地面に沈んでいった。

「さて、こっちも動くか」

そう言い竜哉は、闇に消えた。

しかし、竜哉は知らない。この場に、もう1人いたことを。

「くふふふ、なるほどなるほど。私のゲームには面白い予想外というところですか。」

でも、私は、やりますよ。くふふふふふ」

黒い影は、消えて行った。

鳥と龍が会うとき何かが起こる（後書き）

誤字脱字等があったら報告してください。
感想も待っています。

動き出す闇・・・三匹の子豚は見た（前書き）

どうも片瀬 綾です。

動き出す闇・・・三匹の子豚を見た

翌日

「おはよう、鮮ちゃん！ー鈴ちゃん！ー」

元気よく挨拶するのは、近衛優奈。

「おはよう、優奈、今日はやけに元気じゃん！ーどうしたどうした。おねえさんに吐け吐け！ー」

こちらもハイテンションな遊馬鈴。

「おはよう、優奈。鈴の言うとおりよ。ちょっと元気すぎ！」

「えへへへゝ実はねえ今日・・・ふたご座が1位だったのだ！ー」

「へ！？・・・それだけ？」

2人して、拍子抜けした顔して優奈を見た。

「うん！ー！ー」

優奈は元気よく答えた。

「そ、そうよかったわね。まあ優奈だから許されるわね。あれは」

「あははは、そ、そうだね」

鈴も鮮花もこれには苦笑이었다。

すると、

「お前ら席着け!!」

担任が教室に入ってきた。

みないそいそと席に着いた。そんな頃、男組とはというと、

「なあー瞬、鮮花かわいいよなあー」

鈴と話している鮮花を見ながら良は言った。

「ふうーん。良って鮮花に惚れてたんだ。初めて知った」

瞬は、窓の外の一点を觀ながら返した。

「え!?!俺、お前に、言った気がするぞ。そんなときや、瞬、お前、確か協力するとか言ってた気がする」

「へー、だったら、そうなんじゃない」

「だったらそうじゃないってなんだよ!?!っていうか俺の話し聞いている?」

良がわめいているが瞬は良の話を聞いている様子じゃない。
なおも、窓の外の一点を觀ながら返した。

「お前ら席着け!!」

そんなときに、教室に担任がやってきた。
そのとき、瞬は見た、空中に眼玉のようなものが瞬きする瞬間を。

ただいまの時刻12:38

NSN部室

「あーたるいなー。揚羽くコーヒーくれる？」

ソファでゆったりしている翔。

「揚羽く私もコーヒー頂戴。砂糖多めで頼むわね」

一人で囲碁をしている百合。

「はぁーい。翔さんはブラックでいいんですうよねえ？」

と頑張るメイド揚羽。

「うん。ブラックでねーよろしくー」

なおも、ソファで和む翔。

「はぁー竜哉さんまだですか」

などとコーヒーを淹れながらつぶやく恋する乙女16才。噂をする
となんとやらか

「うーす。誰かいるって結構いるな」

竜哉が来た。

「おー竜哉授業はどうした？」

翔が竜哉に訊く。

「サボった。つか、今さっき起きた」

さらっと竜哉は言うこれは立派に‘不’良である。

「竜哉さん、コーヒー要りますか？」

こんな時にけなげに気づかいをする揚羽であつた。

「ん、せっかくだしもらうわ。ブラックでね揚羽」

「はい!!」

元気よく揚羽が応える。それを、温かくみる翔。

「やつぱ、なごむな、揚羽見てると」と一言漏らす。

ここで、囲碁をやめた百合が竜哉に近づいて

「竜哉、あんた・・・いえ、なんでもないわ」

「なんだよ。まったく」

首をかしげる竜哉。

「コーヒーできましたよお」

そこに、コーヒーを持ってきた揚羽が来た。

「ん、ありがとう」

「いえいつもやってることなんで」

はにかむ揚羽。そして、和む場。

それから、竜哉は百合と将棋して、過ごしていた。
だが、

「っ!」

とてつもない殺気を感じ窓の外を見た。だが、だれも見当たらない。
竜哉は意識を集中して3匹の子豚の眼で見た。すると、殺気の主が
いた、というか見た。

「どうしたの、竜哉」

いきなり席を立て目をつぶった竜也を不審に思った百合は、竜哉
に訊いた。

「仕事ができた。ちょっと行ってくるわ。あ、あとこれで詰みだ」

「へ?えーーーーーちょっと待ちなさいよ竜哉」

さっさと部室を出ていく竜哉に叫ぶ百合。走りながら懷から携帯を

出して電話する。

「もしもし、俺だ。・・・ターゲットが出た。・・・場所をメールで送る。

・・ああ、俺が何とかしてみるわ。・・・ああ、じゃ」

電話を切つて。竜哉は、目的の場所に走る。

もう、みんなは帰っている時刻、そんなときに、教室に、鮮花と瞬はいた。

「おい、鮮花、見つかった？」

「ううん、たしか、ここにあったはずなんだけどな」

机の中やらロッカーの中やらを探している。
すると

「おい、鮮花、これじゃない？」

瞬が手に十字架が3つつながったのネックレスを握って鮮花に見せた。

「そう！それぞれ。よかった、みつかった」

嬉しそうにそのネックレス握る鮮花。

「そんなに大事なものなら、今度からちゃんともつとくように」

「はい！..!」

そうして、彼らはふと気づく、周りに誰もいないことを、
いや、人という気配が消えた世界に来ているようなそんな錯覚を起
こしかける空間に。

「鮮花、早く帰ろう。なんか嫌な予感がする」

「う、うん」

2人とも何とも言えない嫌な感じを感じながら帰ろうとすると

くふふふふ、どこに行くんですか。あなたたちは

どこからともなく声が聞こえた。

「誰だ!？」

「誰!？」

瞬と鮮花が同時に叫ぶ。

くふふふふ、そうですね。誰と言われましても。しいて言うなら。
プレイヤーですよ、そして、あなたたちを狩るものです

その瞬間二人の目の前に闇が生まれそこから人が出てきた。
真っ黒なスーツを着た男が。

「初めまして、葛城鮮花さん、瞬君」

「あなた、もしかして最近起こっている六大家関係者連続殺人事件

の犯人ですね」

瞬は、その男の目をまっすぐに見て言った。

「ほーさすがというべきか。この状況で冷静に私の正体を見破るとは。

はい、そうです。私が殺したのですよ、くふふ。あなたたちは、わたしをどこまで楽しませることが出来ますか？」

男が言った瞬間、殺気が男の周りから噴き出した。

それに、瞬と鮮花は、一瞬ひるんでしまった。その隙に、男は、瞬の懐に入りパンチを5発浴びせた。

それにとっさに腕で防ぐが耐えきれず瞬は、吹っ飛び壁にぶつかった。

「っ！瞬君！！この、吹っ飛べ」

鮮花が言った時、鮮花の周りに、いくつもの銃や刀が浮かぶ。

そして、銃は男に向かって火を吹き、刀は、男に向かって飛んだ。だが、男はよけようとしないうち、いや、よける必要がないのだ。

闇よ。応えよ。

男の周りに、闇がまとわりつき銃弾はそれに触れた瞬間灰になり、刀は朽ちた。

その闇は、まだ消えない。

闇よ。舞え。

鮮花を飲み込もうかのように、鮮花に、向かってきた。

「くっ！？」

しかし、闇は、突然現れた盾に阻まれた。

「くふふふ。なかなかやりますね。これでこそです」

闇よ。舞え。舞え。舞え。

闇が姿を変えた。三匹の狼に変わり。盾を壊し鮮花を食おうと襲いかかった。

鮮花は、このとき反応できなかった。食われる！そう鮮花が思った、だが、食われなかった。

なぜなら、狼を三匹の子豚が防いでいたからだ。ぶひっ！！そう鳴きながら狼を押し倒す。

そして、つぶした。狼は闇に戻り、男のほうへ戻った。その様子に男は

「これは、いったい……。なるほど、あの男ですか」

あの男？鮮花は疑問に思いながらもこの子豚は敵ではないと瞬時に判断し、瞬のもとに走った。

「瞬君！！大丈夫？」

ぐったりしながら瞬は立ち上がった。

「僕は大丈夫。それより、ここから、離れよう。」

今この状況では、逃げたほうがいいと瞬は考えた。逃げる時間ぐら
いは、
あの子豚たちがやってくれるだろうと希望的観測に縋った上での考
えであった。

「逃がしませんよ」

闇よ。踊れ。

闇が増えて2人を覆いかぶさろうとするが、ぶひっ！！何とも緊張
感に欠けた鳴き声で、
子豚たちは、闇を鼻息で吹き飛ばした。

「いま！！」

鮮花が叫んだ二人はがむしゃらに走った。

「ちっ。まあいいでしょう。逃げる獲物を追うのも狩の醍醐味です
からね。くふふふ」

不気味な笑い声をあげながら男は闇に消えた。男が消えた数分後ド
ンッ！！！！

教室に大きな音を上げて竜哉が現れた。

「ちっ、遅かったか」

竜哉は、子豚を鮮花たちの探索に再度回した。

「はぁーめんどくせえ。あいつの能力壊すの疲れた。しかも、能力
が何か知らんがうまく発動ができないな」

そう呟きながらその手に、先ほどの男の写真とプロフィールが載った資料をもち。彼も、闇に消えた。

動き出す闇・・・三匹の子豚は見た（後書き）

誤字脱字等がありましたら報告してください。
感想も待っています。

事件の収束とともに明かされる事実（前書き）

どうも片瀬 綾です。

事件の収束とともに明かされる事実

「はあ、はあ、はあ・・・」

息を荒くしているのは、逃げている鮮花と瞬。

「とりあえず、ここから出たいけど、なんか変だよね。」

「うん、あの男の能力じゃないかな。これも」

「これからどうするの?」

「とりあえず僕達じゃあいつは倒せない。しかも、いまいち能力がうまく発動しないし。」

とりあえずは逃げたほうがいいと思う。鮮花はどう思う?」

「私もここは逃げたほうがいいと思うけど」

「けど?」

「あの子豚みたいなやつを持ち主とあの男に言った言葉が引っかかるの」

「言葉って? あいつ何言ったの?」

「あの子豚を見て“なるほど、あの男ですか”って。つまり、やつは少なくとも子豚の主を知ってる。私はそう思うの」

「でも、今この状況でそれがわかってても状況は何も改善されない。」

「じゃあまずは校門のところに行こう外に出れるかも」

「ええ、そうね。わかった。行こう」

「やっと見つけましたよ。二人とも」

「またも、どこからともなく声が聞こえる。」

「なんで！？どうして？」

「闇がある限り私から逃げられませんよ。今度は、あの子豚もいません。どうしますか」

さっきの戦闘で自分とあの男の実力差がわかっている。それ故に、動けない。

男が、鮮花たちに攻撃をしようとしたとき、それは起こった。

「はあーやっと見つけたぞ。めんどくせえ」

やる気のない声が聞こえた。

「くっ！貴様は！」

空から降り立った青年・・・竜哉がここに今参戦した。

「よつと、初めまして、黒西正剛さん」

竜哉の言葉に男・黒西は眉をひそめた。

「貴様、なぜ私の名前を知っている」

それに対し、

「いやね、知り合いやあのくそじいじいどもが情報をくれてね」

そう、手に持った資料を見せながら言った。二人の姿が月明かりに照らされ、顔がはっきりとわかるようになる。

「「お、奥村先輩!？」」

鮮花と瞬は、驚きのあまり、口が開いたままになっている。

「ん、ああ、まあ、おつかれ、こっからは俺の仕事だから、任しときな」

そう、鮮花たちに言った竜哉は黒西のほうに向きなあった。

「あんた黒西正剛は昔六大家の近衛家の分家榛葉家はるはだった。だが榛葉は六大家の近衛家を倒し自分たちが六大家の一員になると反逆を起こした。

しかし、近衛家が所有する特殊戦闘部隊“わが身につける武装はわ

が主を守るがため《アイギス・アイアンメイデン》”

に全滅させられた。はすだけなんだがどういわけか生き残りがいたそれがあんだたった。

旧姓^{じんばせいじん}榛葉^{はるは}犠^ぎ刃^{じん}。そつだろおっさん？」

すると、黒西が微笑を浮かべていた。

「よく調べたな少年だがそんなのどうでもいいこれからどうせお前は死ぬんだからな」

竜哉は不審に思つても、一瞬で考えは無駄と判断し、攻撃しようとした。だが、それは行われなかった。

竜哉の足にいくつもの黒い手がからみついて地面にできた暗闇に引きずり込もうと蠢くさながら闇の底なし沼とでも言うべきか。

それにより竜哉は攻撃するのをやめなければならなくなった。この状態では動くことすら困難である。

「この状態では動くことはもちろん能力すら使用できまい。それで貴様は何者だ？」

男、黒西は胸のあたりまで沈んだ竜哉を見下しながら竜哉に向かって訊いた。

「てめえに言わなきゃいけないのかよ」

生意気な返しをする竜哉。そんな竜哉を見下しつつ何か考え始めた黒西。

すると何かを思い出したかのような顔になり、さらに、薄気味悪い笑みを浮かべた。

「貴様、見たことがあるぞ、そうだ！！お前、葛城竜哉だな。そうだ、葛城竜哉だ。資料で見たぞ！」

黒西のこの言葉に、この場にいる全員が、固まった。竜哉は、黒西を睨むように、かつ、なぜ知っているのかという疑問を顔に浮かべ。鮮花と瞬は、自分たちの兄が、死んだと聞かされていた兄が。名前を変え、さらに、自分たちの目の前にいることが、信じられないといった様子で、そしてこの状況を整理できていない状態であった。

「に、兄さん？ほんとに兄さんなのか？」

「に、兄様」

かろうじて出た言葉がこれだった。そう聞かれた竜哉はもうごまかせないと悟ったのか天を仰ぎながら。

「ああ、そうだよ。俺はお前たちの兄だよ。しかし、ばれるの早すぎる」

その答えに、双子はさまざまな思いを抱きつつも必死に竜哉に向かって抗議をした。

「な、なんで言ってくれなかったんだよ。あのときに」

「そうですよ、兄様！」

「いや、あの場所で言ったらダメだろ。つか、俺言つつもりなかったし」

「ふざけないでください。僕たちがどんな思いだったか特に鮮花は……」

「あゝちよつとまでその話はこれが終わった後ならいくらでも話してやるからいったん黙れ」

声をいつもの重く反論させないような言い方で瞬たちを黙らせた竜哉。そして、黒西に向かって

「おれさあゝ葛城竜哉って許した奴ら以外で言っただやっ今まで例外なくぶち殺してるんだよね」

そう言った瞬間、黒西は、地面に這いつくばった。

「くっ！」

闇よ。舞え

闇の狼を竜哉に向かわせ本気で殺そうとした。だが、

「無駄だ」

竜哉の背中から黒炎の翼を生やし闇の沼からぬけ空中に逃げる。そして、次の瞬間闇の狼は黒炎に焼かれた。

「な、何！？」

しかし、黒西は竜哉が黒炎の翼を生やした瞬間に拘束が解かれ、自由になった。黒西は臆せず能力を発動させた。

闇よ。踊れ。

闇が竜哉を包む。
しかし、

「だから、無駄」

闇が飛び散った。黒西に近づいた竜哉は、黒西に向かってこう言った。

「お前、六大家相手だと能力が強くなる制約を付けたな」

「くふふふ、そのとおりですよ。だから、しね!!」

闇よ。襲え

闇が槍の形に変化し竜哉に飛んできた。竜哉は、闇の槍を燃やした。闇の槍は、しばらくの間燃えて塵ひとつ残らず消えた。

「どおりで俺の能力が効きにくいわけだ。今のも普通なら炎に触れた瞬間に消えるのに。でもまあ、死ね」

そう言つて、竜哉は背中の中の炎を右腕に集め、黒西に向かって噴射した。

もちろん、黒西はよける。そして、すぐに闇の剣を作り出すそして、黒西は、竜哉に斬りかかる。

だが、竜哉はどこからともなく出した日本刀で防ぐ、

「ざんねーん、で、し、た、ー」

そのまま切り払う竜哉。後ろに跳ぶ黒西そのまま闇を纏い空中に退避。

それを追う竜哉だがその方法に驚く。

なんとまるで階段があるかのように空気の上を歩く竜哉。

「まあそんなに逃げんなよ。おっさん」

刀を上段に構えながら黒西に迫る。

「それでも意地はあるのでね。それと君はなぜ自分を捨てた弟妹きょうだいを助けようとするんですか？」

黒西も闇の剣を2本創りだし迎撃する。

「あゝあ、うるせえ。おっさん、それは訊くのがおかしいだろ。うんなもん決まってるよ。」

お互いにつば競り合いをして動かない。だが徐々にだが竜哉の方が押されつつある。

「ほおー、なんですかそれは。教えてください私に」

「おっさん、それは訊くなよ。馬鹿が」

押されつつあった竜哉が一言、たった一言言い終えた後すぐに刀を放棄して離脱その瞬間、

刀が爆発黒西は巻き込まれる形で爆撃に当たる。そこに、竜哉は畳み込む手の形をまるで銃のような形にするといきなり、

バン、バン、と口にして言うしかしこの後信じられないことが起る銃の形にした手から銃弾が発射された。

それも、一つだけではなく竜哉がバンというたびに銃弾が発射される。そして、銃声がやむ黒西が落下した場所に砂煙が舞っている。

「ふふっ、さすがとでも言いましょうか。一応は12使徒の一員であるということか」

そこから声が聞こえた。

「そうだな。だが、おっさん上と左右気をつけるよ」

砂煙が晴れると少々傷があるが別段命の危機ほどではないほどの傷しか受けていない黒西がいた。
だがさっきまでとは違う点があった。

「ん、な！？しまった！」

すると、すでに黒西の両腕と頭に子豚が引っ付いていた。

「いつ、憑かせた？」

「あんたが剣で斬りかかってきたときにね。っというわけでチエックメイトだ」

パチンっと思を鳴らす竜哉。次の瞬間、子豚たちが爆発した。黒西はなすすべもなく爆撃される。
だが、黒西は最後に竜哉に言った。

「お前の、演算能力一時的に奪わせてもらう」

そして、黒西が完全に爆発した。そのとき、竜哉の左目が無くなり

血が噴き出した。
その光景に、

「に、兄さん!？」

「に、兄様!？」

鮮花と瞬は、驚き、竜哉に駆け寄る。そんな3人の背後に1人の男・
・近衛魁が来た。
それに気づいた2人は、すぐに、臨戦態勢になる。

「おいおい、俺は敵じゃねえよ。つか、竜哉はどうなってるわけ？」

「「え?」「」

「あ、あの兄様の知り合いなんですか？」

恐る恐る鮮花が訊く。

「ん、に、兄様?・・・ああ、なるほど。ばれたのか」

魁は一瞬悩むがすぐに納得したというような顔をした。

「ああ、そうだよ。名前は、伏せておくけど。しいていけば、通_トり
リガーハッピー
すがりの乱射魔でよろしく。
とりあえず竜哉を運ぼうか？」

「あ、は、はい」

そのあとは、竜哉を治療系の能力者のところに運んだ。後日、竜哉

が起きた時、鮮花と瞬から質問攻めにあつたり、それがほかの奴に見つかり、またも質問攻めがあつたり。楓とケーキ屋に連れて行つたりといろいろあつたがそれは別の話。

竜哉は、ベッドの上で考え事をしていた。今回のことで、自分の正体の6割がばれてしまった。

これから、鮮花たちに真実をすべて話すべきか否かを。

「まあ、なるようになれか」

そう、結論付けて寝ようとした。が、ピンポーン、無視、ピンポーン、ムシ、ピンポーンピンポーンピンポーン……

「うるせえ ええええええ！！！！」

「あ！！おはようございます。兄様！」

玄関にいたのは鮮花だった。前の事件で兄と発覚した後結構な頻度で竜哉の家に来るようになっていた。

昔、甘えることができなかったことを今しようとするがのごとくそれはもう恋する乙女張りのような。

つまるところ、ブラコン娘と化しているのだ、しかも重度の。

「またか。はあーまあいいや。とりあえず入れよ」

「はい！」

笑顔で返事する鮮花だった。こんな日常も悪くないと思った竜哉であった。

そして、追い出された馬鹿と中に入るタイミングを失った瞬間は、二人で今後の方向性について話し合ったらしい。

暗闇に複数の人間がいた。

「準備はとうですか？くすっ」

「それが、思った以上に遅れています」

「そうですね。まあ、僕も兵士が足りませんからまだ動く時ではないようです。くすっ」

「えー、また延期かよ。いつになったら殺せるんだよ。はあーあ」

「こらこら、我慢して。これは大切なことよ“紅月”は失敗が許せないのだから」

「そうだね、“紅月”を成功させるために。主は汝を導くであろう」

「くす、おでえたちも頑張る」

「そうですね、みなさんテキパキ働いて“紅月”を成功させましょう。くすっ」

「・・・・・・・・・・」

その夜、月は出なかった。

事件の収束とともに明かされる事実（後書き）

誤字脱字等ありましたら報告してください。
感想も待っています。

間章く事件後の兄弟妹く（前書き）

どうも片瀬 綾です。

間章　事件後の兄弟妹

そこは混沌と化していた。

「瞬君。そこをどいてください」

笑顔で言う鮮花。それが逆に怖い。

（やばい、この笑顔は黒い。黒すぎる）

そう、瞬は思った。彼らの兄である奥村竜哉が正座で鮮花の前にいる。

「兄様、わかっていますよね？」

これまた、笑顔で言う鮮花。

（これ、やべえってマジでやべえよ。う、後ろに般若がいるぅー！）

「はい。わかっています」

なぜか敬語で答える竜哉。ここからすぐにでも出て行きたいとそう竜哉と瞬は思った。

どうしてこうなったかというところ3日前。

竜哉が目を覚めたのは、事件の2日後だった。

（たかが演算能力を一時的に奪われたぐらいで。なまっ たかな）

ベッド上でそんなことを考えていると

「兄様!!」

「兄さん!!」

鮮花と瞬が病室に飛び込んできた。

「うお!？」

驚く竜哉。

「って鮮花と瞬じゃないか。ビックリさせんなよ」

「すみません、兄さん。でもでs」

「兄様! どういうことか説明してもらいますからね」

病室に突然入ってきてこんなことを言いだす双子の姉?の方。

「元気になったようだな」

「ごちゃごちゃと喚いている双子（とはいっても主に姉?のほうではあるが）の後ろから近衛魁が入ってきた竜哉に声をかけた。

双子の叫びをガン無視して魁と竜哉は話す。そうまさに、双子がい

「ああ、大分なだが俺もなまったよ。あれぐらいで」

「へー、でもよ演算能力奪われたらお前の体の機能保てないからし
ようがなくなねえ」

「だとしてもだ」

「あつ！それとなじいS」

「兄様！聞いていますか！」

「はい！？」

「いいですか、兄様。」

「はい」

「今までのことを含めて説明をしてください。そして、この人は誰ですか？」

「あ、なんとというか、言いにくいんだけどこいつの名前は、近衛魁だ」

「・・・・・・ええええええええええええ！？」
 つてskjdhnぎふぁ」

しばしお待ちを。只今鮮花、瞬両名の頭が混乱中。

5分後・・・

「失礼しました。はしたない声を上げてしまいましたの」

「僕もすいませんでした。なんか色々ともう。あはは」

何事もなかったかのように綺麗に頭を下げる鮮花。頭を掻きながら苦笑している瞬。
とりあえず落ち着いたようだ。

（まあこれからが本番なんだがな）

そう竜哉は思いつつも双子に向けて一言。

「寝る！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

現実逃避するようだ。

「まあ、お前たちも日にちを改めることだ。こうなった竜哉は起きないぞ」

そう言う魁の目線の先には早くもぐっすりと寝る竜哉の寝顔である。

その後、魁は双子に問いただされていたことはもちろんのことである。

そして、竜哉の部屋にはこの部屋の主の1人である竜哉はもちろん鮮花、瞬の双子が揃っている。

「んじゃ、どこから知りたい？」

「兄様が家を出るきっかけからです」

「右に同じ」

「そっか。わかった長くなるがいいな。まず俺はあの家で能力が発現しなかった落ちこぼれだったな？」

「まあそうでしたけど兄さんは努力してましたよね。僕知ってましたから」

「あゝまあいろいろやってできなかったんだから変らねえよ。

話を戻すけど、俺はアイツってか俺に言わせると元親父に飛行機チケットと金を渡されて勘当させられたんだよ。

うんでもって、乗った飛行機がテロでジャックされて墜落そんな時のけがで皮肉なことに能力が発現したんだよ」

「“外発的発現”だね」

肯定とばかりに首を縦に振る竜哉。

「でも、そんなことって」

手で口をふさぐ鮮花とは対照的に瞬は冷静に兄竜哉の話を聞き考え

る。

「でも兄さん、その時負った傷は何ですかそれに能力は」

「まあ落ち着けこれからだから。それで、そんな俺を拾って能力の使い方やらを仕込んだのが、今、新聖12使徒のボスのスラバー・イリードグだ。そんなもって俺もその一員で序列7位な」

「「なっ!？」」

口が開いたままになる双子

「ちよつと待つてください兄様。本当に兄様は12使徒の一員なんですか？」

「うんそうだよ、ちなみに魁もだ」

もはや絶句何も言えない双子。そんな状況の中でも話を続ける彼らの兄であつた。

「続いて俺の能力だけど名前は『スヴァルトオールヴヘイム闇に堕ちる世界』」

自分の支配領域においてありえない現実をあり得る現実として実現することはできる能力だ」

(まあ1%でも起こることは実現できないけどな)

「すごいです兄様。さすがです!」

「すごいね、兄さんこれは僕の予想の斜め上をいったよ」

それを聞いた双子の反応はそれぞれ感想を口に出す双子である。

「ちなみに、この能力で事故の時に無くした左目と内臓の一部を賄
ってるだけだな」

ブチッ！ なにかが切れる音がした。

「兄様、もう一度言ってください、もう一度！」

そして冒頭に移るわけだ。

そんな感じで……

「兄様いいですか、何でそんな重要なことさもついでのように……」

ぺちやくちやぺちやくちや只今鮮花の説教中である。そうして彼ら
兄弟妹の平和な日常は過ぎてゆく。

「学園のランク調査が始まる頃力」

「そうですね。僕ちんも楽しみなんだなおい」

「わたくしもですわ、そしてこれからわたくしたちの踏み台になる

方たちに幸福を」

怪しい3人組も動き出す波乱のランク調査が始まる。

「世界に幸福を。人々に愛を。そして、私たちに正義を。
ついに我々が動く時が来た。みなのもの、我たちの望みかなえる時
が来た。

いざゆかん樂園に」

指導者もまた動き出す。動き始めた物語は止められない螺旋のよう
にまわりまわりまわる。

それがたとえ惨劇だろうが、ハッピーエンドだろうが。
まわるまわるまわる。それが世界、それが人。

次は誰の物語がからんでくるのだろうか。

間章「事件後の兄弟妹」（後書き）

誤字脱字等がありましたら報告してください。
感想も待っています。

これで第一章は終わりです。次は第二章ですが少々時間がかかると
思うのでご了承を。

初夏、力を持つものたちの宴の前の日々（前書き）

どうも片瀬 綾です。

初夏、力を持つものたちの宴の前の日々

5月それはみながだるくなったり精神的に鬱になってくる月。そんな月の始まりは能力測定通称ランク調査の今年第一回目である。そんなイベントが始まる今日この頃各人はどうしているか見てみよう。

奥村竜哉の場合

「ぐうぐすぴ……ぐうぐすぴ」

寝ていた。

部室で寝ていた。なぜか部室にあるベッドで気持ちよさそうに寝ていた。

しかし、彼の睡眠を妨げるものがいた。それは、

「兄様～いますか？いたら返事してください？しないと……です
よ！」

遅咲きの目覚めたブラコン娘、鮮花登場である。

ちなみに自分の部屋に鮮花が頻繁に来るようになり寝ていられなくなったので部室のベッドを使う羽目になっている竜哉であった。

「兄様ここにいたんですか！、って寝てる。はあ～起きて下さい兄様」

「う、うん。あ、と10、ぶん」

「後10分じゃありません。起きて下さい、兄様」

「はあゝもう奥の手を使うしかありませんね。先に謝っておきます兄様」

そう言つと鮮花は竜哉の耳に自分の口を近づけて、ふうゝ

「~~~~~」（言葉にならない悲鳴）

カツと眼を見開いた竜哉は周りを見渡し鮮花を見た瞬間バツと距離をとつた。

「あ、鮮花、お、お前何した？」

若干上ずつた声で聞く。

「えゝと秘密です兄様！」

質問の答えに答えず満面の笑みを返す妹に竜哉は心の中でため息をついた。

「それより兄様、起きたなら来て下さい。生徒会の仕事手伝つて約束しましたよね」

首をかしげながら指は顎に当てるしぐさはまさにかわいいの一言に尽きる。

だが、竜哉はめんどくさそうに眠いと連呼する。

「兄様、約束しましたよね。あれ言いますよ」

その一言で固まる竜哉。あれがなにか気になるがここはひとまずおいておこう。

「マ、マジで」

「マジです」

「わ、わかった。手伝う！手伝うからあれは言わないでくれ」

冷や汗をたらしながら竜哉は渋々了承した。

その答えを鮮花は聞くと笑顔とともに竜哉の腕を取り自分の腕と組み合わせる。

いわゆる鮮花が竜哉と腕を組んでいる状態となる。

「ちょ、ちょっと鮮花やめろつて。歩きづらい」

「罰です。約束を忘れた罰しばらくこうしていることです」

無邪気な笑顔を振りまく鮮花。

それに何もいえない竜哉。

2人は（一人は半分引きずられているが）生徒会室へ行くのであった。

そんな兄妹の1コマ。彼らの頭の中にはランク調査のことなど入っていないのである。

円堂雄介の場合

「じじ…… どじ？」

迷っていた。そんな時電話が鳴った。

「もしもし…… いやわかんないけど…… まじで！
サンキュー助かるぜ…… へーい」

電話を切った雄介は空を見上げ何かを待っているようであった。
すると、

「きたか。つか、ランク調査の時期か。何も起こんなきゃいいけど」

おおきな鳥のようなものが近づいてきた。

「おい迎えに来てやったぞカス。早く乗れカス」

その鳥のようなものの上に乗っている人物がいた。

その人物の名前は東条聖矢とうじょうせいやといい学年やそもそも学園の生徒かすらわかっていない素性不明の男だ。だが金さえ払えばなんでもしてくれる何でも屋みたいなことをしているため今回行方不明だった雄介の回収をやらされているのであった。

「すまん、てまかけさせて」

「ふん、まあ、いいさ。こちらは金をもらってやってることだ。気にするな」

その後はお互いに無言で学園に帰っていった。

「ランク調査に変なやつが混じるのは嫌だな」

雄介のその呟きは誰の耳にも届かなかった。

相馬陽の場合

誰もいない今は使われていない教室に陽はいた。
携帯電話を片手に誰かと電話している。

「もしもし・・・てめえかよ。何のようだよ。・・・ああ、ふざけるなよ。あんたのせいで、あの人達が、あの人が、どうなったか知らないわけじゃねえだろ。俺はお前を許しはしない絶対に・・・何！？どうゆうことだ？なぜ罪なき聖人ヘステイアが動く？あそこはただの下請けの組織じゃ・・・アルカディア・黒色月下の動きが怪しいからか・・・っちも正しいもう二度と俺の目の前に出るなよ。・・・命の保障はできないぞ」

「つくそ。ふざけるな。・・・みんな、無事でいてくれよ」

暗闇に映るは悲しげな表情の陽の顔だった。

そのときの陽の心の内は誰にもわからない。

何を思っ、何をしているかそれすらも本人にしかわからない。

ただやれることはこの先、彼の選択が間違いでないことを祈るしかない。

黒桐準一郎と狩野健二の場合

2人は今部室にはいない、ではどこか。
答えは視聴覚室。

「働け馬鹿」

「うわっ、ひど。ひどくねえ、それは」

「うるさい手を止めるな。お前がとめていいのは息だけだ」

「はいはい。って息止めたら俺死ぬから！」

「ほんとに息止めるぞ。さっさとやれ」

「はいはい、てか多くね。これ」

「しょうがないだろ、あいつらがサボりまくってるんだから。おまえもだけどな」

「けっ、しょうがねえ。……これは」

「どうした健二？」

「いや、これ“血統ではなく人為的に強力な能力者が生み出せないか”、“才能という枠を壊し新たな枠を作ることによる能力者の影響”、とか他にもあるけど著者が一緒に内容が非道德的だっていうレポート」

「それは確か八幡英二のだったな」
やはたえいじ

「そつ、あの人がやってるかわからないからねつと」

「そうだな、なにかとうわさが出るがどれも証拠がない。不気味な存在だな」

「しかも、本気でかかると火傷するやつだしな」

「そう、この学園に潜む陰の存在の1人だから厄介極まりない。それより馬鹿終わったか」

「え！？いや、終わるわけじゃないやん」

「俺は終わった。後頼んだぞ。じゃあな」

そついうと準一郎は部屋から出て行った。

「ちょっと待ってって、待って待ってええええええええええええ。はあー終わらないし。それにしても、才能という枠を壊し別の枠を作る、か、師匠が昔そんなこと言ってたような気がする」

部屋に残るは馬鹿と大量の書類だけであつた。
健一

矢島翔と神無揚羽と遠野百合の場合

学園内にあるというかあっていいのかわからないが教会に3人はいた。

「だるい。だるいんですけど」

「うるさい。こっちだって嫌々来てんの」

「あわわわ、喧嘩しないでくださいよぉ」

呼び出されてイラついている百合が、いつも以上にだらけている翔に若干きれる。

それを止めようとする揚羽。

なんともビミョーな空気になったがそれを破るものが来た。
教会のドアを勢い良く開ける物がいた。

そこには修道女というにはいささか露出度が高い修道服を着た女がいた。

「おー揃ってんなー結構結構、上出来上出来」

「シスター何の用だよこっちだってだるいのにがんばってきてんだからくだらなかったら。帰るからな」

シスターを睨みながら翔が言った。

「あゝそんな眼で睨むなって。おねえさんは君達にお願いがあるんだよね」

そう苦笑とともにシスターは翔たちに言った。

「最近調子に乗ってる生徒がいるから程よくぶっ飛ばしてくんない」

「は！？意味わかんないんだけど。なんで私達がやらなきゃいけないわけ？」

ここまでの流れでイラついていた百合が文句を言う。

「お前ら強いじゃん。半殺しでいいから、ね」

「まあまあ2人とも落ち着いてくださいですう。とりあえず話だけでも聞きましょうよ」

揚羽のこの一言に落ち着いた2人はとりあえず話だけは聞こうとする。

「あゝほんといい子だね。揚羽は。でだ、最近ちよつとばかり学園内に怪しい動きがあったからそれを調べるののついでだ」

「はあゝで私達のメリットは？」

「単位をやる一学期分の」

「やる！（やるわ！）」「」

翔と百合がいきなり立ちあがり大声を出した。
そのせいで揚羽は口を開け呆然とする。

「へ！？え、え、え？いきなりどうしたんですか」

「シスター話は乗った。単位忘れんなよー」

翔は颯爽と教会から出て行った。

百合もその後を追うように教会から出て行く。

「え！？待ってくださいよお」

揚羽も急いで2人の後を追う。

「おい、アルカディアとヘステイア罪なき聖人だぞー」

シスターは大声で教会を出て行った3人に追加の情報を叫ぶ。
こんな重大なこと大声でいいのかと思うがまあ気にしたら負けだろう。

九鳳院楓の場合

楓は生徒会室にいた。木之本司とともに資料をまとめていた。

「あーもう終わらない。どんだけあるのこれ」

「仕方ないだろう。もうすぐランク調査なんだから生徒達的能力やランクの管理のための資料を準備するのは生徒会の業務のひとつだろ」

「やだやだー竜ちゃんに会いたいーあ・い・た・い」

「そんな子供みたいなこといわずやれ。やらないともう二度と竜哉に会わせないぞ」

楓を睨む司。 たじろぐ楓。 さすがは鬼の生徒会副会長。

「ふ、ふん、わ、わかったわよ。やればいいんでしょ。まったく」

その後、淡々と業務をこなす楓。ここを見ると完璧人間にしか見えない。

いつもこうだといいんだが。

そううまくは行かないそれが人生である。

「ただいま参りました。楓さん手伝いに来ました!」

鮮花および連れ出された竜哉が登場。

それを見た楓。急激に部屋の空気が変化するのがわかった司は密かに壁のある場所を押す。

壁が回転し司は消えた。誰も気づかない。まさかのギミックである。

「竜哉、なんで鮮花と腕を組んでるのかな」

満面の笑顔で眼だけは笑わず竜哉に質問する楓。

冷や汗が大量に噴出す竜哉は逃げようとするが、鮮花と腕を組んでいるため動けない。

「い、いや、鮮花が勝手り、イタツイタツて」

「兄様は私と腕を組んでここに来ました」

腕をつねられる竜哉、笑顔のままでそれをやる鮮花も鮮花であるが。ただこのとき彼女達が思ったことはただひとつ
ハ（鮮花）楓さんは（竜哉）兄様のことが……

（鮮花）楓さんは敵
だ！

このときから2人の間に時たま火花が散ることになる。

そんな事を思っていた2人をよそに竜哉はあくびをしながらめんどくさいと心の中で思いつつ

彼女達の本当の想いに答える資格はないと感ずるのであった。

初夏、力を持つものたちの宴の前の日々（後書き）

ここから二章の始まりです。

感想くれるとやる気沸くんで送ってくれるとうれしいです。
批評とかもあると勉強になるんで

誤字脱字等もありました報告してください。

ここから新キャラやら能力やら増えていくよていです。
がんばっていくんで応援してください。

いよいよはじまるよーランク調査！（前書き）

どうもー片瀬綾です。

いよいよはじまるよーランク調査！

「はい皆さん元気ですかー元気ですかー私は元気だよー！」

放送部部长紅刹那くれないせつながグラウンドに集まった生徒達に向かって放送を流す。

「『元気だよー』『』」

元気に答えるのは刹那のファンクラブその名を“聖女のような声を持つ刹那様を信奉するもの”そのほかにも色々とあったりできたりするのだが。ともあれ今この場に生徒達が集まっているのはランク調査をするためでありこの炎天下の中でやるのは誰しもつらいであろう。

「ではでは、みなさんが楽しみにしているランク調査のはじまりだよー！能力系統別とランク別に並んでくださいねー！」

そう刹那がランク調査の始まりを告げた、が、そこに乱入する声があった。

「おおー麗しきmy sister いつも以上に可憐な声だーこちを向いてくれーセ、ツ、ナー！愛してるぞー」

端的に言うのであればそこにはまさしく変態がいた。

なぜかというとまず制服を着ているであろう上半身に服がないのだ。つまりは半裸状態。そして、さっきから叫んでいる実の妹に向けての熱烈なラブコール。

これを変態といわずになんと言うのか、否、変態である。

そして、この男の名は紅篝くれないかがりもとい変態だ。
そんな男でもランク？であるのだから世の中おかしい。

「うるせえぞこのシスコン野郎。少しは黙りやがれ」

準一郎がきれた。篝に向かつて暴言を吐く。なぜか、準一郎は馬鹿とシスコンには厳しく当たるのであった。

だが、その暴言の嵐に加わる形でファンクラブのやつらも加勢する。

「そつだそつだ少しは黙つてろよ、シスコン！我々の刹那様に声かけんな。嫌がつてるだろうが」

「キエロキエロ、シスコンヤロウ」

騒ぐファンクラブのやつら。

「何だとうるさいのはお前達のほうだろうがお前達の雑音のせいで刹那の声が聞けないだろうが！」

さらに喧嘩に火を注ぐ。

「ああ！やるならやろつぜ！表に出ろよ。全員で叩き潰してやるぜ！」

「ああゝみんなが私のために、争わないでゝつとこれは横においておいてつとみなさん最初はランク？の自然系能力のひとつからでーす。あとランク？の人は体育館でまとめてやるので集まっておいでください。ではみなさんがんばってくださいねゝ」

今までの刹那ファンクラブおよび兄篝のいざこざをすべてスルーし

て放送を続けるあたり簞の妹である。
ちなみにだが彼らも竜哉たちを知るものである。

「あゝめんどくさい。俺、実は暑いのも寒いのもだめなんだよね」
使われていない教室でさっきのやり取りを見ている竜哉と翔。

「あゝ俺も俺も。ちょっとだるくなるんだよね」

教室の窓の外に手を出してグラウンドを見てる翔。
隣には竜哉が眠そうに壁に凭れて座ってる。

「だるいつて翔はいつもだろ。はあゝ生まれてくる星間違えたかな」
変なことを口走る竜哉それを普通にスルーして会話を進める翔。

「なあゝお前どうすんの能力」

「えゝと、去年に重力使いつてことにしたからそれでいく」

「……………どうやって？」

「だから、対象の上の空気を固体にして重力増させるの。はい、
これで簡易重力加重能力の出来上がり！」

「それでいいのかよ。はあー俺どっしょかなー」

空を見てこれからの予定を組み立てる、だが、どうやったってうまくこまかせない。

憂鬱な気分になってくる午前の翔であった。

竜哉はすでに寝ているのでもはやごまかすといったレベルではない。ふとグラウンドを見ると篝火と刹那ファンクラブと戦っていた。なぜか半裸で。

「はあ、今日も平和だぜ、だるいけど」

「イツ動くのカナ？」

「しばしお待ちを。まだ始まって間もないもうちょっと先ですよ。しかし、いつでも動けるようにしておいてください」

「ワカッタ。オレヤルヨ。コウインのいったトオりに」

「がんばりましょう。ネームレス」

「わたくしの生贄になるのは誰かしら？楽しみだわ、強い人がいいわ」

「だめですよ、屍ドウルガーの上に立つ女王、今回はアシュヴィンとテフヌトに会うのが目的です。戦闘はは極力やめてくださいよ」

「そんな事いって自分だって暴れたいくせに我慢しちゃって。境界シヤクテイ線をなくす紳士」

「2人トモ、ケンカ八だめ！ナカヨクシナキヤ」

「うっ、わ、わかったわよ。まったくあんと一緒だところちの調子が狂うのよね」

「そうですね、喧嘩はいけませんね。さてそろそろいい頃合です。皆さん配置に行ってください」

「Yes！我々は自身の夢と我らが長の夢をかなえるために！」

「さあ、行きましようたのしいたのしい触れ合いをしに」

「はあーい二列に並んでください。ランク？の自然系能力者の人は学籍番号と氏名を係員に言って下さい。あとは係員の指示に従って調査をしてください」

白衣を着た20代前半の女性が拡声器を持って生徒たちに指示を送っている。

ここで能力の分類というものを説明しよう。

能力には大きく分けて5つの分類に分けられる。

・自然系

この世界の自然環境に属したもしくは関連した能力を持つ系統。特徴は応用が利き凡庸性が高い。また、この系統は能力の強弱のばらつきが目立つ。

・感応系

主にテレパスといった精神系に及ぼす能力の系統。特徴は物理的攻撃力をもつ能力が少ない。また、攻撃系かサポートのどちらかがはっきり分かれるのも特徴の1つである。

・治療系

その名のとおり治療に関係した能力の系統である。特徴は5つの系統（特殊系を除く）の中で唯一物理的にも精神的にも攻撃方法を持たない能力系統である。

・感覚系

支配領域といった特殊な領域をもち、その中で能力が発動、反応、発揮する能力系統。特徴は他の能力系統（特殊系を除く）のくらべ多種多様の能力があり、奇抜な能力があることもある。

・特殊系

能力系統として例外がある能力系統他の能力系統とはちがい、センスや才能といった分野に頼る能力系統。大きな特徴としてはどの能力も代償が必要であり、それは能力をはじめて使ったときに払われるものや使用するたびに払わなければいけないものなどさまざまである。またこの系統の能力者は変わり者が多く扱いが難しく組織等では厄介者扱いをされるのが多い。

これが5つの能力系統である。

閑話休題

「あの的に炎の玉で当ててください」

「わかりました。……はっ」

「あとちょっとでしたね。次に行つて下さい。…… 次の方どうぞ」

といった具合にどんどん調査が終わっていく。

そしてランク？の生徒が終わり次はランク？つまり竜哉たちの番である。

「はい次の方どうぞ」

「奥村竜哉、学籍番号・・・2331です」

「はい、えーと奥村君は重力加重だね？」

「はい！」

堂々と嘘を言う竜哉。

だがばれない、なぜだ。それは、1年のときにやってしまった件が絡んでくる。

これにより大半の係員つまりは研究生には知られており（真実の1割程度しかもフィクションも混ぜて）どうという事でもないのだ。

「では、あの空き缶を潰してください」

「はっい。わかりました」

やる気が感じられない声色でやる竜哉。

だがその瞬間ベキッという音ともに空き缶がつぶれていた。

半分までだが。もちろん竜哉が手を抜いたからではあるが。

「はい、次に行つて下さい」

「はい」

こうして竜哉の能力偽装計画の第一歩は成された。

その後の調査もこんな感じでのらりくらりとやってきた竜哉。

そんな時彼の頭の中ではどこで寝ようかを話し合っていた。

するとベンチを発見する竜哉。しかも木陰にあるもちろん寝にいく竜哉。

しかし、そこには彼が良く知る人物にあつてしまう事になった。

いよいよはじまるよーランク調査！（後書き）

誤字脱字等がありましたら感想のところに。

感想や批評も待ってます。

風荒れ狂う、残るのは何も無し

学園に帰ってきた雄介は聖矢と分かれランク調査に参加し今しがた終わったところであった。

当てもなく歩き、歩き、歩き着いたのは森の中だった。

周りには木、木、木、木、木、木

木しかない。

ここで彼は言う。

「……ここどこ？」

………

迷っている。もはや才能の域である

とはいえしばらく歩くと木陰にあるベンチを見つけた雄介。

雄介はそのまま休むのにちょうどいいと思いベンチに寝転がった。

空を眺めながら自分の感覚を空気に混ぜるように集中する。

雄介の能力は『風の戯れ』アイオロス 自然系能力。風を操る能力であり、風圧や風力といったものまで操れるため凡庸性が高い能力である。この能力によって雄介は風と感覚を共有化しようとしている。

「…… やっぱ気持ちがいい。この感覚、この高揚する気持ち。最

高だな」

雄介は感じる。

すべてを、世界を、この世の中の隅々まで。

木から木へ飛びうつるモモンガ。

空に羽ばたく雀。

気ままに屋上に寝そべる猫。

グラウンドで物を浮かせ動かす少女の姿を。

土くれのゴーレムを作り出す少年の姿を。

炎を身に纏う少年の姿を。

空を飛びまわる少女の姿を。

それら全てを見て、感じて、触れて、分かる。

自分の存在がまるで無く、個人ではなく集団になる感覚。

そこで雄介は見た。

不穏な動きをする、いや、警備員をたった今殺した少年か少女か区別のつかない人間の姿を。

雄介の動きは速かった。すぐさまそこに行こうと感覚の共有を解除し風の上に乗るそこに向かう。

「やつは見逃せないわな。目の前で人殺しは」

「いやはや、ここの警備員はお強いですね。でも、私のほうが強いですよ」

そう言うのは、さきほど少女と少年と会っていた男とも女ともいえない中性的な容姿をした少年だった。

彼は、今学園の入り口におり入ろうとしたところで警備員に止められたが逆に殺したところであった。

その証拠に服には返り血がべっとりとついている。

しかし、彼もしくは彼女はそこかしろに血をまちらして学園に向かって歩き出した。

だが、そのあしはすぐに止まることになった。

彼または彼女は、何者かが近づいてくることが分かったのだ。

彼または彼女はその名の知らないものを殺すために戦闘態勢に移る。そして彼ら2人は出会う。

颯爽とかける雄介。

器用に木々の間を駆け抜けていく。

「おおっともうすぐだな。ほいっと」

そして目的の場所に到着した雄介。

これまた器用に木の上に乗る身を隠す。

そつと木の陰から覗くと1人の男？女？がいた。

よく見ようとしたそのときだった、その男？女？はこちらを見た。

明らかに雄介の眼をみた。目線があった。

ヤラレルそう思った雄介はすぐにそこから離れ攻撃に移った。

雄介は手を横に払う。

すると風が集まり無形の斬撃が男？女？に向かって一直線に飛んでいく。

男？女？を切断しようと男？女？に肉薄する。

だが、風による無形の斬撃は奇怪な鈴が鳴るとともにそよ風に変化した。

「なっ！？何が起こってるんだよ。ちく、しょうがつ」

小さな竜巻を4つ生み出したも男？女？を4方から挟み込んで圧殺しようとする。

だがこれもそよ風になり無意味になってしまふ。
男？女？はそこでにやりと不気味な笑みを浮かべる。

「これは、これはどなたかと思えばあなたは“ラタトスク 狂気に染まった栗鼠”の傍らにいた風使いではないですか」

「ん、どつかであつたかお前」

「いえいえ、こちらが一方的に知っているだけです。それと自己紹介がまだでしたね。私は青峰あおみねこうよう 鴻妖シーヤクテイ またの名を境界線をなくす紳士です。以後お見知りおきを」

そう言い男？女？は丁寧にお辞儀をした。

これに雄介は虚を突かれ攻撃をやめた。

「で、あんたがその警備員を殺したのか？」

「そうです、と言つたらどうするんですか？」

「もちろん。殺す！」

そういうと同時に体に風を纏い通常の何倍かの速さで男？女？に接近し手刀を繰り出す。

「おっと。あぶない、あぶない」

だがその攻撃を難なくよける男？女？。

さらに怒涛の攻撃をする雄介。

しかしそれさえも難なくよけられる。

だが男？女？はただただよけるだけ。

攻撃してこない。

「おらよつと。どうした？あんた攻撃してこないのか？」

「今回は目的がありますし。あなたをここで殺す命令は受けていないですよ。それにしてもやりますね」

「うるせえよ。てめえは何の目的でここに来てんだよ！」

「いやはや、風を纏つての高速戦闘ですか一撃がナイフいや剣になるか。すごいですよ！ 目的は秘密です」

「くそつ、さすがって風の意味がなくなってるし」

そついくら当ててもただの手刀になるのである。

「ええ、絶望的に私とあなたでは相性が悪いですね。とりあえず寝ていてください」

いきなり雄介の背後に現れた男？女？は逆に雄介に手刀を繰り出す。さらにダメ押しに鳩尾に一発蹴りを入れる。

「なっ！？うぐう」

「さて、私はここから移動して目的を達しましょうか」

倒れる雄介。

それを興味がなくなつたような眼で一瞥し、この場から離れようとする男？女？。

そして目的を達しようとして先に行こうとしたそのときだった。

男？女？の背後から声が聞こえた。かすかだが聞こえたのだ。後ろを振り返るとそこには雄介が立っていた。

「ぐっ、待てよ。まだまだだぜ。このおかま野郎」

息も絶え絶えに目に前の相手向かつて挑発をする。

「なんと！立てるのですか！？しかしわたしはおかまではありませんせんよ」

立てるはずの無いダメージを与えたはずの相手が立っていること、そしてまだ戦おうとしている、それに驚きまたそれとなく挑発部分を訂正する男？女？。

しかしそんなことをしゃべっていると雄介と男？女？を中心とし周りに風が起こり、ついには1つのドームのように風が2人を覆った。そして雄介は一言この現象の完成のための鍵を言う。

「つと、死ねや。フィンフルヴェト“最後の暴嵐”！」

その瞬間ドームの中は風というのがおこがましいほどの自然の暴力という暴力にさらされた。

もちろん中にいる2人にはそれが全てあたる。

「こ、これは。っち、境界線が無い！これでは、ぐおお」

「はあ、はあ。これでいいだろうが、馬鹿やろう」

壮絶な轟音とともにドームがはじけ風は天に向かって消えていった。残されたのは傷だらけの雄介と辛うじてたっている男？女？の2人であり、その周りには血が大量に流れていた。しばらくして雄介は意識をなくした。男？女？が何か言ったようだがそれは雄介の耳には届かなかった。

「……………Lei sia forte.（あなたは強かった）」

そついい足を引きずりながらこの場を離れる男？女？。

続けて“*Io perdo la linea di confine del corpo.*”そう呟くと、体が元に戻り怪我が全て無くなった。そして男？女？は目的のために足を進める。

ベンチで寝ようとした竜哉はあまりの驚きで声が一瞬出せなかった。ベンチには銀髪をたなびかせまるでフランス人形のように顔のパーツ全てが一種の美術品であるがのような少女がいた。

そして彼女は竜哉とは顔見知りでありそれゆえに竜哉は驚いた。

「お、お前は。何でここにいる！答える！お前がここになぜいるんだ！」

「……………私はあなたに会いに来た。ただそれだけ」

「それだけだと！何で俺の目の前に現れるんだ。・・・ユニ」

ユニと呼ばれた少女は淡々に必要事象だけを言う。

そこには感情は無かった。

そしていつもとは違い竜哉は感情を表に出しその顔には怒り、疑問、悲しみといったさまざまな感情が見え隠れしている。

「・・・・・・・・私達は必ず“紅月”を成功させる。3年前とは違うから」

「ルベリア機関はもう神^{ルキフェル}への反逆からは離反してあの計画は意味がなくなっただんじや」

「・・・・・・・・もともと私達の願いの1つにその計画が含まれていた。だから私達は“紅月”を成功させる。竜哉は手を出さないで」

「なぜだ！？なんでそんなことを言いに来た！俺はそんなことを聞いたら邪魔しなきゃいけないだろうが！あんなものはこの世に存在してはいけない！」

「・・・・・・・・だからだよ、竜哉」

「どっという意味だ！ユニ！」

「・・・・・・・・もう時間みたいじゃあね。死んじやいけないよ竜哉」

そういうと空間に穴が開きそこから手が伸びユニを覆い隠し次の瞬間には穴はなくなっておりもちろんあの手やユニもいなくなってい

た。

「お、おい！待っ^てくれ！待っ^てくれよ！ユニ！」

「くそつ。どうしたらいいんだよ。．．．．．めんどくせえ」

竜哉は天を仰ぎ呟いた。

風荒れ狂う、残るのは何も無し（後書き）

誤字脱字がありましたら言ってください。
感想もくれたらうれしいです。

博識人は悪魔を呼び本気になる

ここは校舎裏

そこには準一郎と気持ちの悪い笑みを浮かべた少年達がいた。そこに流れるのは友好的なものではなくピリピリとした空気が流れている。

準一郎は彼らを睨むだけだった。

「ははっ、黒桐く〜ん！おまえって人に向かって能力使ったことが無いんだってな」

「てかさ、黒桐くんは防御特化の能力だったよね。たしか、だからさよわ〜い俺たちの能力の練習台になってくれないかな〜」

薄気味悪い笑みのまま明らかにおかしいことを言うてくる彼らに、準一郎はイラつくがここで怒って手を出したりはしない。

すれば彼らの思う壺になるとわかっていいるからである。

黙ってここをどうするか考えていると彼らの中の1人出てきた。

「ひゃひゃひゃ〜ノウでもイエスでもやるけどな！」

そっつい準一郎に向かって殴りかかった。

骨が砕ける音と肉がつぶれる鈍い音が校舎裏に響いた。

その正体は泥の壁だった。そこから泥でできた犬のような狼のような生き物の頭部が生えており、

男は拳ごとその泥の怪物に喰われた。

準一郎はただその状況を見るだけその顔には何も映さない。

そしてもちろんこの泥の壁も泥の怪物も準一郎の能力である。

『サンドマスター地獄砂塵』雄介と同じく自然系能力、だが雄介の能力とは違いこ

の能力は

砂や土を媒介に特定の座標に防御壁を作るただそれだけである。ただそれだけ。

だがこの壁には近づいたものを無差別に喰らうという特性を持つ。それが黒桐準一郎の能力の全てである

「な、何だよこれ！？こ、こんなん聞いてねえぞ」

拳ごと喰われた男子生徒は慌てふためき、手はぐちゃぐちゃになっており骨が見え隠れする。

なんともグロテスクである。

「俺だつて聞いてねえよ、こんなの。どうなつてやがるあいつは土の壁を作り出すだけって言つてたじゃんかよ！」

「ほう、それを誰か言つていたのか聞いてみたいな」

泥の壁の向こうから低い声が聞こえた。

もちろん準一郎なのだが、その声だけで彼らを錯乱させるのには十分だった。

「ふ、ふざけんな。俺たちランク？がランク？に負けるかよ。お、お前ら早くやれ！」

不安や恐怖を抱きながらも彼らは自分達よりも格下であるはずの存在に負けられないというプライドが彼らがここから逃げ出すという選択肢を自ら無くす。

そして彼らは戦うという選択肢を選んでしまつ、それが間違いであるがこの選択肢しか選べないそれが彼らの底なのだ。

このあととはもはや戦いにすらなつていなかった。

彼らが準一郎に近づいて攻撃しようとする、と泥の壁が出てきてさらにそこから泥の怪物が襲う。

また遠くから狙おうと能力を使えば泥の壁に阻まれ、怪物に喰われる。

もはや一方的、なすすべも無く彼らはやられる。

そして彼らは泥の中で気絶している。

その中の1人を準一郎は胸倉をつかんで強引に起こした。

「ん、・・・な、なんだよ！」

いきなり起こされた男子生徒は準一郎の顔を見ると顔色を青くしパニックになる。

「何だよじゃない。俺の能力を誰から教えてもらった？教える」

強気で男子生徒を脅す準一郎。その姿に怯えたのか恐怖を感じたのかは知らないが、男子生徒はおもむろに話し出す。

「わ、わかった言う言うから！ あいつの名前は知らないがあいつは知らないことは無いって呼ばれていた。それだけだあいつが俺たち^{オッカム}に情報をやるから好きにしろって言ったんだ。本当だ、本当なんだよ」

「ん、なるほど、情報屋か。しかし誰の依頼だ？それは置いといてこの分だと竜哉達の方も行ってな。今年も通り魔が出てくるのかはあゝ後処理が多くなるな。勘弁してくれよ。まったく」

愚痴をこぼしながら準一郎は竜哉達に合流すべく動く。

奇しくもこのときの彼の一言は半分あたりであり半分はずれになることになる。

同時刻

陽、翔、揚羽、百合は集まっていた。

このメンバーでなにをしているかというと昼ごはんを食べている。昼にはちよつと早いこの時間に食堂の一角を占拠している集団とも呼べるが。

「マルやんもリュウやんもクロやんもどっか行ったニヤ」

陽はツナサンドを頬張りながら、今この場にはいないメンバーについて話題を振った。

最も彼の中には心配のしの字も無いが。ともあれ彼らがこの場にいず、なおかつ厄介事に巻き込まれているということは予想できている陽だった。

「どうせあれでしょ。私達あまり好かれてないから」

ロコモコを食べながら百合もまた陽と同じことを考えていた。私達は厄介事に巻き込まれやすいと。

「あ、自覚あったんだ、百合」

百合の言葉に反応した翔。彼はただいま牛丼を食べているが百合の自分自身の客観的印象を気づいていたとは知らずにいた翔であった。

「し、しつれいね！私だってそれくらいは感じるわよ！ってか雄介は勝手に消えたんでしょうが」

顔を若干真っ赤にしながら反論する百合。

「み、みなさん健二先輩のこと忘れてますう」

「」「あ！」「」

そして哀れにも忘れられていたかわいそうな馬鹿、いや健二を揚羽の一言で思い出した三人。
もはやかわいそうの一言に尽きる哀れ馬鹿。

「で、あの馬鹿はどこに言っただんだニヤー」

「知らないわよ。どうせどこかで馬鹿やってるんでしょ」

「たしか、篝先輩と喧嘩してましたあ」

「あゝあいつらしいな。それにしても俺達ってあれだなあゝなんかいちゃもんつけられやすいよな」

「だって私達はたから見たら馬鹿と怠け者と落ちこぼれの集まりよ」

「まあただ本気出してないだけなんだニヤー。だけど勘違いするやつがいると」

「その人たちが私達にけんかを売るともしくは襲う、でも、私達は負けないただそれだけよ」

「まあとくに竜哉の場合会長さんとか百合とかと仲がいいからな。それ故にだよ、揚羽」

最後のほうが何かを含む言い方の翔、視線は揚羽に注がれている。

「んゝ敵は多しですう！」

その意味を理解した揚羽は一人恋する乙女として一言ポツリともらず。

「何の話よそれ」

それを聞いた百合は何のことかわからず頭にはてなマークを浮かべた。

「な、なんでもないですう」

必死にごまかす揚羽。

ここはいつもと同じく平和である。だが彼らにも襲い掛かる。

残念ながら。愚かな者達が。

ここは誰も使っていない空き教室、第一音楽室
そこに男はいた。

「よく来たね」

男は教室のドアにいる準一郎に気づき声をかける。
その声はとても透明であつた。

「あんたは何時もここにいるだろ」

準一郎はそんな男の言葉を気にせず教室内に入ってくる。
情報を得るために。

「そうだね。それで君はどの情報を買いに来たのかな？」

男は愉快に準一郎に聞く。

「おまえが情報を買ったやつの情報だ“知らないことは無い”オッカム教え
ろ」

準一郎は先ほど男子生徒から得た情報でここまでたどり着いた。
情報売っているやつの下に。

「黒桐君それはお客のプライバシーにかかわるんだけど」

男は残念そうに準一郎に答える。

しかし、準一郎はここで退くことはしない、むしろそんなことすら考えていない。

「いいから早く教えろ。こっちは暇じゃないんだよ」

眼鏡をキリツと上げて準一郎は言葉を続ける。

男はしょうがないとでも言うように両手をひらひらした。

「しょうがないな〜じゃあ異名でいいかなその人の」

男は情報屋の意地なのかしらないが本名は明かさない。

だがそれでもいい準一郎は少しでも情報があればいいから。

「ん、それでもいい。で」

シナリオライター

「演出家と言っていた。これでいいですか」

シナリオライター

演出家とは何者が推察するが見当もつかないのでいったん考えないようにする準一郎だが、あいつ等なら知っているかとも思い今ここでは考えることは無意味だと考え思考をやめる。

「十分だ。じゃあな」

もう用はないとでも言うかのようにすぐさま反転しこの教室から出て行く準一郎。

「はい。あつ振込みはいつもの口座でよろしくお願いしますよ」

そんな彼の後ろから声をかける、いや、商売の話金を話を大声で
準一郎の背中にかける男であつた。
その男の顔には微笑が浮かんでいた。

博識人は悪魔を呼び本気になる（後書き）

誤字脱字等があれば指摘を。

感想もくれるとうれしいです。

むしろ、くれ。

神の声を聞くとときその者の道は決まる

「ここにいたのかお前達」

「クロやんだニャー。今までどこに行ってたニャー」

「絡まれた、ただそれだけだ」

「それは災難だったな準一郎」

「そうでもない。おかげで面白い情報を手に入れた。知ってるか演^{シナ}
リオライター
出家っていう奴を」

「私は知らないわ。そいつ何者よ」

「いやな絡んだ奴に聞いたたら俺達的能力を教えられていたからな、
ちよつとゆすつたら情報元をはいてくれたよ」

「んゝたぶんんだけどそれ“必要悪の正義”の一員だと思うニャ
ザラスシュトラ
」

「聞いた事の無い組織だな。でも、何でそう思うんだよ、陽？」

「そんな変な名前いう奴らは“必要悪の正義”で決まりだニャー」
ザラスシュトラ

「ふゝん。で、その組織はどんなことしてるのよ」

「えゝと、来たニャー。・・・まあ簡単に言うとも何でも屋だニャー」

「で、そのメンバーの奴が今回の黒幕ないし裏にいるわけだ。こりやだるくなるな」

「み、皆さんどうしたんですかあ？あ、黒桐先輩戻ってきてたんですかあ？」

「ああ、今来た所だよ。揚羽」

「いやな、今回はいつも以上にだるくなるな。って話してたところなの」

「は、はあ」

「だからさ、とりあえず竜哉たちを呼び寄せようかってね」

「それなら、俺がもうした。雄介は知らんが、竜哉はもうすぐ来るだそうだ」

「OK。とりあえずこの話は後でってことね」

三時間前

「もしも〜し、ん、準一郎かよ。何のようだ？・・・あ
ゝ、分かった多分すぐ行けるだろうから待っててくれ・・・
・・・ん、わかった。じゃあな〜」

携帯片手にほつつき歩く竜哉。

だが、彼の眼には赤い逆十時がともっている。
だるそうに先ほど携帯にかかってきた電話のとおり準一郎に合流
するために食堂に向かう。

「さて、行くか。それにしてもどうにもきな臭くなってきたな。め
んどくせえ〜。」

ん〜とあいつらは食堂だっけ？」

1人で考えているといつの間にか目の前に1人の男がいた。
その男は筋肉質な体格をしていて、竜哉の最初の印象は暑苦しいの
一言に尽きる。

「おい！おまえが奥村竜哉だな？」

男が竜哉に向かって怒鳴る。

「そつですけど何か？」

それをもつこれ異常ないほど無気力かつ相手をイラつかせるように
返す竜哉。

その返しに対し男は怒るではない別の反応をした。

「ふっ、いやな、お前も大変だな。この赤石吾慟様^{あかいつじよう}にやられるんだから、な！」

そして、その台詞とともに竜哉に向かって殴りかかった。

「わ！？てめえいきなり何すんだよ！」

急いでそれを横に転がることでよける竜哉。

相手のいきなりの行動にビックリするがすぐに戦闘用の思考に切り替える。

「あゝああ、な〜にある人物に頼まれてよくお前をぶっ殺してくれてな。まあお前、九鳳院会長と仲良いし、な！」

なおも攻撃を繰り返す吾慟。

パンチやキックさらには裏拳などさまざまな体術で竜哉に攻撃をする。

普通の人間なら即死亡の攻撃の嵐。

だが、それを間一髪の所でよけ続ける竜哉、伊達に神聖12使徒の一員ではないということだ。

「っち、今年も厄介なのに巻き込まれたな。はあゝ、じゃ、やりますか！」

「オラよ！そこ、もらったー！」

竜哉のちよつとした隙を逃さず攻撃する吾慟。
だが、

「うるさい、ちよつと黙ってろ」

竜哉の能力によって自身の上に存在する空気を常温にて固体化、その膨大な質量が吾慟に降りかかる。

「うぐつ。だが、甘いのはお前だ、よ！」

普通なら地面にうつ伏せになるがそれを耐える吾慟。

「ほお、それに耐えるのか。身体強化のほうでもかなり上位だな」

その状況に感心する竜哉。そして、相手を分析する。
戦闘において情報は有利になる武器だからだ。

昔、竜哉の師匠をした男が言った言葉を竜哉は今も守っている。

「当たり前だろうが。俺様は最強なんだからな」

「八極拳を主体としムエタイやサバットの要素も含んでるな」

「よく分かったな。そうこれはおれがあらゆる武術を取り入れ独自に開発した我流だ！この戦闘術に死角は無い」

「たしかに、その戦闘術はさすがだよ。だがな、能力運用はまだまだだな」

その言葉とともに吾道の周りの空気が変わる。

「なんだ！？これは、てめえ何しやがった！？」

そして、吾慟は動かない、いや、動けないのだ。

「てめえは動けねえよ。人間は周りにものがあつたら人は動けないだろ？」

「どういう、ことだ？」

竜哉の言葉が分からず混乱する吾慟。

だが、彼もまたこの状況において自分がどうすればいいのかを考える。

「冥土の土産だ。教えてやるよ。てめえの周りには固体化した空気がある。つまりてめえはコンクリに埋められたような状態なんだよ」

竜哉が得意げに話す。

いつもの竜哉では考えられない、そして、その理由は能力にある。あえて言うなら、彼の心は限界だと、でもいつておこつ。

「それがおまえの能力か？」

「それはどうかな？まあ寝てろ」

いつもの竜哉に戻って吾慟の頭上の空気をほんの少し気体に戻す。

つまり、それより上の空気の膨大な質量が降ってくる。

しかも頭に。よって脳震盪となる。

「つちくしょおおおー！」

その叫びとともに彼の意識は真っ暗になった。

竜哉と同じ頃、第二グラウンド裏
そこに百合と翔と数人の男がいた。

「で、何の用かしら？」

百合が、私今チョー不機嫌です的なオーラを出しながら男に向かって言う。

その隣では、翔が眼を半眼にして眠たげにしている。

「げへへへっ、遠野おっやっこの日が来たぜっお前をおれの女にする時がよおっ」

気持ちの悪いデブが気持ち悪く百合に向かって得意げに上から目線で話す。

「はっ、あんた何言ってるのかしら。いつ私があなたの何になるって、冗談は顔、いや、存在だけにしてよね」

それに全身に鳥肌を立て、気持ちが悪くなった百合は、男を挑発する。

この場から一刻も早く逃げたいが周りを完全に囲まれているため応じるしかないという状況だ。
翔は眠そうにしているが。

「ふん、そんなこと言ってるのも今のうちだぜ」

デブはなおも得意げに百合に向かって言う。

「ちょっと翔こいつ何とかしなさいよ」

それにさすがに堪えたのか百合は、

隣で眠そうにしている翔を起こして何とかして貰おうとするのだが、

「はあくやだし。だるいから、てか俺もめっちゃ睨まれてるんだけど」

翔の答えはノー。

「じゃあこうしましょう。あいつは私がやるから他は翔がやってね」

だが、それを無視し作戦を言う百合。

「はああ！？なんで俺がそんな疲れることしなきゃなんねえだよ！」

それに対してももちろん反論する翔。

「昼食奢るから。ほら、がんばって！」

百合のちよつとした譲歩に、

「ちえっ、絶対だからな！奢れよ！」

渋々応じる翔。

がんばれ翔！

「じゃあ商談成立！やりますか」

「じゃあせーのでいきますか」

「「せーの」「」

その瞬間、2人の気配が変わった。

翔は周りにいた男達をどこから出したか分からないナイフで牽制し、自分が囿になりこの場から離す。

百合は、これまたどこから出したか分からない百合の花をばら撒く。

「ぐへへへっ、堪忍したのか？」

「はっ、「冗談でしょ！」」

「うんじゃ、力づくでもおれの女にしてやるぜ！ひいひいいわせてやるからよー！」

「うるさい」

『オープン
展開』

その一言で世界が変わる。

2人だけの世界、そこはうす暗く周りには火のついたろうそくが囲む。

「ここはどこだ？」

突然のことでデブは少し驚くがすぐに理解し、
未だ自分が有利だと確信してやまない顔をしている。

「どこでもいいでしょ」

「けっ、支配領域か」

「正解。そしてあなたに勝つ見込みはなくなった」

「なんだと。だったらこれでも喰らえ！」

デブは、複数の釘を取り出し投げる、その釘達は百合に向かって一
直線に飛ぶ。

「私は神であり、罪も罰もすべては私の名のもとに」

だが、百合の言葉が空間に響くと同時に、

釘は熱で溶けるかのようにドロリとして床に落ち蒸発し消えた。

「なんで、消えるんだよ！」

「私の質問に答えよ。汝の名はなんであるか？汝の性は何か？汝の
正体はなんであるか？汝の年齢はいくつか？汝の目的はなんだ？汝
に与するものは何者であるか？そして、汝、生を求めるか？」

百合の言葉は続く。

「は？何言ってるんだよ？意味わかんねえよ！」

だが、デブはわけが分からないと無視する。

その選択が間違いだと知らず。

「故に罰を与える」

最後の言葉を百合が紡ぐ。

「ば、罰ってなんだよ……………」

デブの言葉は最後まで続かなかった。

デブの眼の焦点は合っておらず口は開いたままよだれが垂れる。

「ふ、だから駄目なのよあんたは」

最後の百合の言葉だけがこの空間に響き渡る。

そして、これらの状況全てが百合の能力『クエッションアンサー神からの質問』によるものである。百合は、発動後対象者に七つの質問をする。その質問に正確に答えなければ、罰を与えるという能力であり、この空間において百合は神と認定されるので何も効かない。ただし、この能力の発動には百合の香りを嗅がせる必要がある、なおかつ一対一の使用で無いと効果が発揮されないというデメリットもある。

そして、翔は覚醒する。

神の声を聞くとときその者の道は決まる（後書き）

どうも片瀬です。

ネタが浮かばない地味に。

感想をくれると作者にやる気がたまります。

幕間く完璧を目指す少女の物語く

泣いた泣いた泣いた泣いた泣いたないたないたないた
ナイタナイタナイタナイタナイタナイタ沢山泣いた。
目が枯れるほど泣いた。

嘘をついた、ついたついたついたついたツイタツイタツイタ
ツイタ

親を周りの大人の期待にこたえるために。

そして彼女は仮面をかぶった。
完璧という名の仮面をかぶった。

しかし、彼女はマダ未熟であつた。他の子達よりは熟した未熟だつ
た。

世界に数人しかないKキングになれる可能性を持った子供だったから。

彼女は完璧の仮面をかぶり続けた。
自分と他人をだます仮面をかぶり続けた。

それによって自分が完璧で在れると信じて。

ただそれだけを信じて。

だが彼女はその時はまだ外の世界を見ていなかった。

自分の他の高位に存在するものたちに会っていなかった。

だが彼女は自分の出生と能力のために自分を偽った。

完璧という名の仮面をかぶり他人を自分をだましてきた。

だから、彼女は自分が嫌いだった。嫌いで嫌いで堪らなかった。

完璧であろうとした不完壁な彼女は、そんな自分がいやだった。

だからなのだろう彼女は仮面をかぶることに慣れすぎてしまった、

否、それが普通であり当然であるようになってしまった。

だから気がつかなかった。

彼女が求める本当のものが。

それから彼女は仮面をかぶり過ごしていた。

だが、それも崩れかけることが起こる。

故に、彼女は気が付くのであった。

自分が求めるものの本当のことを。

自身がどれだけ愚かしくも儚いものなのかを。

そして見てしまった自分とはまったく違う人を、

生きかたも力も全て違う人を見てしまった、知ってしまった。

見た見た見たみたみたみたミタミタミタ

見てしまった。

世界の欠片のモノを。

自分とはベクトルの違う力を。

彼女は渴望し憧れ、気になった。

それがとてもとても気になってしょうがなかった。

彼女が押し込めた本当の感情の中の物が出てくるのを抑えられなかった。

彼女がその正体を知らなかった。

それほどまで彼女は仮面をかぶりすぎたのだ。

だが、知ってしまった本当の気持ち。

渴望や羨みであつたはずの感情が、愛に変わったことを。

それから彼女は仮面を脱ぐようになった。

それが彼女に対して良いことなのかは、誰も知らない。
知っているのは神のみである。

この物語は続くいつまでも完璧を求めるからこそ、
彼女はKとはべつ^{キング}の

完璧ではなく未成熟だからこそ完璧という力を手に入れることができるだろう。

そして、彼女が別の物語と接触することは必然であり、それにより彼女自身が変わることができる事象なのである。

だから、彼女は、完璧スッペルでない、故に未熟なのだ。

この物語は続く……

幕間く完璧を目指す少女の物語く（後書き）

誤字脱字等があれば指摘してください。

感想も待ってます。

日が頂点に達する頃ら人が騒ぎを起こす

ここは校舎裏。誰もいない。

そして、この場所には、いくつもの倒れている男子生徒たちがいる。それら男子生徒の屍の山の上に座っている上半身裸の半裸男、紅篝とそれをどこか呆れているような目で篝を見る健二がいた。

「あつい〜あつい〜、暑いんだよ〜健二くん」

手をうちわにしながら篝は、健二にばやく。

それもそのはず今日は夏真っ只中、気温30 に達する程は無いにしろ、アスファルトの照り返しなどで体感温度は想像できるだろう。

「暑いって言うと余計に暑いんで黙ってください。篝さん」

あくまで冷静に返す健二。

彼もまたこの暑さに参っているのである。

「うるせえな。今の俺は刹那に会えなかったからイライラしてるんだよ」

「・・・・シスコン」

ぼそつと健二が呟く。

「だまれ馬鹿」

すかさず返ってくる・

地獄耳かと健二は疑った。

「はあ、それにしてもやりますね篤さん。こんだけの数相手に無傷
って」

「うるせえよ。俺はただ愛しの刹那を厭らしい目で見てたこいつら
をシバいただけだ」

どこまでも刹那主義人間いわゆるシスコン相手に何を言っても無駄
だと分かった健二。

そして、どうでも良くなった健二であった。

「さいですか」

「ところで健二はこんなとこで何してんだ？」

ふと気づいたように篤が健二に聞く。

「いやね、ちよつち今年も命知らずの馬鹿どもが出てきたんでそれ
の監視とあぶり出し中なんすよ」

「あ、あゝなるほど、命知らずか。今年は何人やられるかね」

「えゝと、今のところざつと数えて20人は動いてるかな」

「おーおー、去年より少ないじゃねえか。なにか草食系男子だから
か？あゝあゝ」

彼らの言う命知らずとは、このランク調査の間、教師陣は全て調査
のほうへ回るので喧嘩や能力行使等しても何も罰されないという
か気づかないので鬱憤や私情での襲撃が多いのだ。

そして、その襲撃者のことを言うのである。

なぜかという狙われる人物、その中でも特に狙われているのはN
SN部のメンバーであるからだ。

彼らは普段やる気が無いが実際の強さはランク？でも通用するほど
である。

ゆえに、襲撃者は逆に返り討ちに遭う。

「はあ、おっと、陽からだな、”しもしも”、……………わかつ
たすぐ行くわ。……………え？それマジでやんのかよ！……………
……………ねえ、なんか言ってるよ？……………ねえ、嘘だよ、ドッ
キリなんだよね！……………嘘だといってよ！……………ツーツー
ツー”……………”」

「ん、なんかめんどくさそうだから俺行くわ。じゃあな」

「あ、あれ、篝さん。いなくなってるし。まあいいや、そこに隠れ
てる奴出てこいよ。俺が相手になってやるよ」

気が付くと篝は消えており、軽くショックを受ける健二ではあるが、
今の今まで無視していたが、どうにも煩わしくなった健二は、
木の影に潜むものを呼んだ。

「ばれちまったよ。ま、ランク？がこの俺ランク？に勝てるわけ無
いよな」

木の影から出てきたのは、典型的な優男だった。

彼はすぐに見つかったにもかかわらずその顔にはニヒルな笑みを密
かに浮かべていた。

「やってみるか、ランク？さん」

「はっ、ランク？がいきがんなよ！おらよ！」

優男が手のひらから空気の塊を発射する。

それはまさに空気砲のようであり、健二に向かって発射された。優男は思った、これでお終いだと。

「おそえよ、遅すぎるよあんた」

だがその予想もすぐに外れた。

健二は能力を発動し自分自身を一秒間、あの空気の塊が当たる瞬間だけ電子結合をはずし、自分という存在を電子集合体のひとつにしたそれにより攻撃はすり抜けそのまま優男の目の前に移動した。

「いつの間に！？ふざけんな！てめえほんとにランク？かよ！これじゃまるでランク？じゃねえか、話が違うじゃねえか。くそっ、なめんなあー！」

愚痴をこぼしながらも健二から距離をとり、体制を整えようとするが、

「おっと、おいしい！だが、遅い遅すぎる」

すぐに、前に移動されて顔面にパンチを食らう、しかも、電撃つき。

「ガハッ」

「まあ所詮こんなもんか。光より速くはなれないよな」

電撃によって脳をしばらくられながらも優男は奮闘する。
自身のすぐ下に空気砲を発射。

それによる煙幕により健二の攻撃から逃れようとする。だが、

「ほら、もういっちょ！」

すぐに、追いつかれ一発を食らう。

その場でひざまづく優男。

「グハッ。はあ、はあ、お、れを、なめるなああああ！」

「うるせえよ。まだおせえ！」

最後の力を振り絞り優男はよろよろになりながらも立ち上がり、そして

自信が持てる最高の力を能力を行使する。

優男が最後の力を振り絞り発射した空氣の塊は形を鋭利に先端を尖らせ槍のような形状となる。

その空氣の槍とも呼べるものは健二に向かって飛んでいく。

だが、健二には自身を電子化することで攻撃をすり抜けられることができる。

その力を使い健二はその空氣の槍をすり抜け、優男に接近し実体化、電撃の帯びた拳で優男を殴る。

さすがに今度こそは優男もうつ伏せで倒れた。

「ふー終了つと。とりあえず陽たちと合流するかな」

健二は清々しいような顔をしながら陽たちの元に向かうのであった。

ここは学園内の森の中

数人の男子生徒が背を低くして輪になっていた。

「お、おい、本当にやるのか？」

「ここまで来たらやるしかないだろ」

その中の1人が何かにおびえるように他のメンバーに言うが、
彼らは引かない引くわけには行かないのだ。

計画は始まったのだから。

「な、なんで？おい！狩野と奥村に向けた奴らからの連絡が消えたぞ」

「何！？どういうことだ！もしかしてやられたのか？」

「そんなわけねえだろ。あいつらはランク？だぞ！俺らランク？がやられるわけねえだろ！」

そんな中、連絡が取れなくなったメンバー、つまりは、竜哉達を襲った者達が続々と出てきてた。

それが、彼らの不安や混乱を招いた。

「な、なんだこれ！？」

そんなときに探索系の男子生徒がさげんだ。

「どうした！」

「囲まれてる！俺達もうお終いだ！こんな数相手にできるわけが無い！」

急に叫びだした男子生徒に気づいた彼らは何だ、何だと彼に近づく。

「お、おい。何言って・」

「うわああああああ！」

彼が叫んだと同時に彼らの周りから葉木の擦れる音が聞こえてきた。

「なんだこれ」

そして、音の主が現れた。

「ギギギッギギギ」

「キキキッググキキッ」

「グルルルルル」

それは、存在するどの生物にもあたらないほど異形で異常であった。そのの1つは大きく熊のような巨体でありながら腕はグチヨグチヨの肉の塊であり頭部は大きな口がありそこからこれまた大きな牙が見え隠れしている。

また、人型のようなものもありそれは全身に目玉がありそのどれもがギヨロギヨロと動いている。

さらには、狼のような犬のようなものもいて、その容姿は体がどこも爛れており、目玉があるはずの場所のはぼっかりと穴が開いてい

る。

そのようなものどもが彼らの周りを囲っている。

「来るな来るな来るな来るな来るな」

彼らはなすすべも無く倒れていった。

だが、彼らに傷は無い。

なぜなら、それは幻想であつたから。

全て嘘。

全てが幻覚。

「はっはははははははははははははこの俺の前に立つ者はいないのだー」

そんな、彼らが倒れている場所の中心に人がいた。

いやさつきまではいなかった。

そして、その人物は上半身、裸だった。

無論、簀である。

「あら、すこしは骨があるものがいるのね」

そんな男、簀の目の前に黒のゴスロリ衣装を着た少女が出てきた。その手にはピンクのウサギのぬいぐるみを抱えている。

「はっはははははははははは！ん？てめえここの生徒じゃねえな」

「ええ、そうよ。私は外から来た者よ。あなた強そうだし、ちょっと付き合ってもらつかしら。せいぜいあがいてくださいね」

「よっと、生意気言うじゃねえか。いいぜ、その余裕の面何時まで

持つか、な！」

簀が言った瞬間、簀の周りから赤い粉塵が舞った。

そして、少女が気が付いた瞬間には簀は目の前に現れていた。

「ほらほら、どうした？全然攻撃してこないようだが」

簀がどこから出したのかナイフを持って攻撃するが、少女は難なくよける。

「うるさいわね。下僕ヤツテ頂戴」

簀の攻撃に嫌気がさした少女が一言、言った瞬間地面が揺れた。

「おおっと、なんだあ？」

「ふふ、う・し・ろ、危ないわよ」

少女が手に抱えたウサギのぬいぐるみを笑顔で言う。

「っ！」

そして現れる、簀の後ろに黒い影ができる。

簀が振り向くと、そこには、大きな甲冑がいた。

その甲冑が持つ剣が無情にも簀に振り下ろされる。

簀は抵抗することも無く切られた。

「なあんだ、この程度か。つまあんなあい」

ゴスロリの少女はつまらなくなつたような顔をしてこの場から離れ

ようとする。

「おいおい、勝手に殺すなよ」

と、少女が後ろから声がした。

そこには、先ほど甲冑に切られたはずの簀が無傷で立っていた。

「まああ！？やっぱり来てよかったわ。今回の楽しみが増えたわ。やっっておしまいなさい下僕」

「うち、これからだぜ。さあ俺様の宴を始めよう」

その姿を見たゴスロリの少女は、最高の玩具を与えられたような笑みをした。

そして、彼女がまたも一言言うと、先ほどの黒い甲冑が5体ほど出てきた。

そして、簀のほうもまた、周囲から赤い粉塵が舞った。

その瞬間、周りから先ほど男子生徒たちを襲った異形の者達が出てきた。

「グルアアアアアアア」

「グルルルル」

「ギギギツギギギギ」

「ふーん、それがあなたの能力か。転移系いやこれは・・・」

その様子に少女は何かに気づいたが、簀の攻撃によってその考える暇を与えられなかった。

「ほら行くぞ！おらぁ！」

だが、簀が攻撃しようとする、甲冑が瞬時に少女の前に来て少女を守る。

「うふっ、ざーねん。は・ず・れ」

「っち！」

「鬼さんこちら手のなるほうへ」

少女は簀を馬鹿にするように手をたたいて挑発する。

「俺様を馬鹿にするなよな。この罪は重いぜ」

「あら、そうなの？でも私に触れもできないのに？」

「いいや、もう終わった」

だが、その戦いも終わりとなる。

「どういつ、こゝと」

少女が突然、崩れた。

「ふはははははと気づいたか！」

「あなた私に何をしたの？」

「簡単だよ、ほれ見てみ」

篝は、手のひらを見せるとその瞬間、手が剣に変わる。

「なる、ほど幻術にはまったのね」

それを見て少女は、先ほどの考えがあっていることに気が付く。

「そういうことだ。チェックメイトだよ」

そして、止めをさそうと篝が一步少女に近づく。

「ふふっ」

突然、少女が笑いだす。

そして篝はふと気づく、彼女が持っていたはずのピンクのウサギのぬいぐるみがなくなっていることを。

「何がおかしい」

「この程度の幻術で私に勝ったつもりなんて可笑しくて可笑しくて教えてあげるこの程度じゃ私は倒せないということを」

「へえ、どうやるんだ」

「こうするのよっ」

少女が突如、自分の手を頭に刺した。

比喻ではなく、現実。

少女のその行動に篝は、怪訝な表情をした。

「幻術とは相手の脳に作用して幻覚を見せ、現実には起きていないことを起きていると思込込ませる術。だから、脳を弄ればすむのよね。いたた、さてこれであたのアドバンテージは消えたどうするの？」

「つち、自分の頭をふつつ弄るかよ。まあどつ」

幻術を破られるが、まだ攻撃をしようとする簗だが、その言葉が遮られる。

「いけないですよ屍ドゥルガーの上に立つ女王、計画に狂いが生じます。すぐに引きなさい」

簗の言葉を遮った者は、先刻、雄介と戦った男？女？であつた。

「はああ！？何言つてんの、てか何でここにいるわけ境界線シャークをなくす紳士ティ」

屍ドゥルガーの上に立つ女王と呼ばれた少女は、これまた、境界線シャークをなくす紳士と呼んだ男？女？に文句を言う。

「いえいえ、私はたまたまここに来ただけです。ただ、貴女の支配領域があつたので戦闘していると分かり来てみれば、このとおり、まったくふざけるのも大概にしてください。私達は目的があつてここに来ているのです」

「あゝあゝ分かつた、分かつた。もう煩いわよあんだ。じゃあ、そういうことだからじゃあね。次は無いわよ」

「では、私も」

この2人は簀を牽制しながらも、言い合っていた、それはつまり簀をいつでも殺せるということを示していた。
その2人はいつの間にか消えていた。

「・・・・・・ははははは、はあく疲れたくありやばかったな。
うち、俺もまだまだってことか」

その事実には、簀は自分を見つめなおして、さりげなく落ち込んでいた。
た。

これは始まりである、彼ら知らない本当の敵が彼らでないことを。

日が頂点に達する頃ら人が騒ぎを起こす（後書き）

あ、あれ主人公が出ない、ど、どうしよう。
まあ、なんとかなるか（爆）

感想、アドバイス等待っています。
誤字脱字等もあつたら教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7081v/>

堕ちた青年の見る世界～螺旋の回廊～

2011年11月4日02時07分発行